週刊 YEAR BOOK

1906
明治39年

日録20世紀

11|17
平成10年11月17日発行
(毎週1回火曜日発行)
第2巻第43号 通巻86号
平成10年7月31日第三種郵便物認可
¥560
講談社

「満鉄」スタート!

ロシア軍捕虜の「松山収容所」抑留記
空前の株ブーム! "成金"鈴久の栄華と没落
冤罪12年!「ドレフュス事件」の無罪確定

“日本株式会社”の原型はここにあった！
社員数6914人、破格の資本金2億円でスタート
国策会社「満鉄」が育てた“頭脳集団”

▲南満州鉄道株式会社旧本社。ロシア支配時代の半落成の学校を整備して、設置された。建物は現存し、大連鉄路分局として使用されている。 C.P.C.

毎日新聞社

▲当時の満鉄病院は、今も、大連鉄路医院として使われている。

▶昭和九年登場の、世界的水準を誇る「あじあ号」のポスター。

◀“大構想”立案が得意だった初代総裁・後藤新平。

明治三九年一一月二六日、「南満州鉄道株式会社（満鉄）」が創立された。この日本最大の株式会社の実態は、日露戦争で獲得した東清鉄道（長春―旅順間）や支線、撫順・煙台炭鉱などを経営し、さらには満州（中国東北部）支配を拡大するための国策会社だった。大陸進出の第一歩を踏み出した日本は、多くの金と人材を満鉄につぎこみ、そこから戦後の日本社会を左右する人々も育っていく。

◎表紙　日露戦争のロシア軍捕虜8万人は、日本で厚遇された。愛媛・松山収容所病室で治療中の傷病兵。 日本赤十字社愛媛県支部提供

▲日本の大陸進出の拠点、遼東半島南端にある大連港。大規模な修築工事が行われ、南満州鉄道と直結された。これにより、満鉄の満州経営が軌道に乗る。

児玉源太郎の急死で初代総裁人事が解決

「南満州鉄道の総裁就任の件、ご辞退申しあげたいのですが……」

明治三九年七月二二日正午すぎ、長年の恩人である児玉源太郎・南満州鉄道創立委員長（五四）の東京・牛込（うしごめ）薬王寺にある邸宅を訪れた後藤新平（しんぺい）・台湾総督府民政長官（四九＝後の東京市長、内相）は開口一番、こう切りだした。

それに対し、満州軍総参謀長として日露戦争を勝利に導いた功労者の児玉は、「君の説に賛同して、自分は軍職にある身の筋違いを承知のうえで創立委員長の任を引き受けた。君は創立にあたって、殖民（しょくみん）政策の中心を担うべきだ」

と三時間にわたり、満鉄の総裁就任を後藤に説得し続けた。児玉が“後藤総裁”にこだわるのは、自分の台湾総督時代、女房役として統治の基礎固めを完成させた手腕を知りつくしていたからだった。

にもかかわらず、後藤は「私は不適任」と断り続ける（台湾に未練があったとも、政府の植民地経営に対する考えの甘さを批判していたからとも言われる）。

ところが、会談の約一〇時間後、児玉が脳溢血で急死。後藤は、師の逝去（せいきょ）を機に総裁就任を受諾する。当時としては破格の資本金二億円で満鉄（社員六九一四人）が創立されたのは、約四ヵ月後の一一月二六日、営業開始は翌明治四〇年四月一日だった。初代総裁に就任した後藤は、政府の干渉を受けないワンマン経営で、“満鉄王国”の基盤作りを成功させた。

"日本株式会社"の原型はここにあった！
社員数6914人、破格の資本金2億円でスタート

国策会社「満鉄」が育てた"頭脳集団"

「昼前の人間を使う」と優秀な人材を次々登用

日露戦争でロシアから獲得した、東清鉄道（長春―旅順間）や支線、撫順・煙台炭鉱などを運営する満鉄のモデルとされたのは、英国の植民地経営を代行していた「東インド会社」だった。実際、満鉄は欧米列強や中国への配慮から、株式会社の体裁を取るが、政府が半額出資しており、内実は国策代行機関だった。

満鉄首脳の顔ぶれは、副総裁が台湾総督府の財務局長だった中村是公（三九＝後に第二代総裁）で、重役も学者、元知事、鉄道技師など各界から登用。社員面接もかって出た後藤は、「午後三時頃の人間は使わない。昼前の人間を使うのだ」と言って、優秀な人材を集めた。

事業は、約七〇〇キロの鉄道と、推定埋蔵量一〇億トンと言われた撫順などの炭鉱運営を主軸に、調査・拓殖・関連会社の経営。後に"泣く子も黙る"と称された関東軍も当初は、満鉄とその付属地を警備する「鉄道守備隊」にすぎなかった。

「当時の植民地統治に関する理論的集大成者だった後藤が、満州に導入した考えは『文装的武備』でした。これは、植民地支配は武力だけでなく教育や学術などを駆使し、日本への畏敬の念を抱かせるべきだというもの。そこで彼は、大連など満鉄線の都市を近代化し、旅順工科学堂（後の旅順工科大学）などの教育施設、調査部などの研究機関を充実させます」

『満鉄――「知の集団」の誕生と死』の著者で、早稲田大学アジア太平洋研究センターの小林英夫教授はそう語る。

特に、明治四〇年に設置された調査部は、当初、満州・モンゴルの政治や慣習の調査が業務の中心だったが、大正一二年の機構改革以降はソビエトや中国本土まで研究対象を拡大。敗戦後の日本再建にも適用できた経済政策を立案する頭脳集団に成長する。

「満州国」を支えた「経済調査会」発足

後藤の退任後も、満鉄は、製造業を担う鞍山製鉄所の開業（大正五年）、大豆・石炭の独占的輸送などが高収益の源となり、昭和四年には八億円と資本金を増資。昭和七年には満州全土の鉄道と、関連会社四〇以上を傘下におさめることになり、"満鉄コンツェルン"と呼ばれるまでに発展をとげた。

この頃には、多彩な人材が調査部に入社していた。そこで、昭和六年九月に「満州事変」が起きると、満鉄は関東軍の手足となって物資・兵員の輸送に奮闘するばかりか、昭和七年一月には調査部を再編。関東軍の指導のもと、満鉄総裁をしのぐ権力を備えた「経済調査会」を発足させる。この機関が、「満州国」（同七年三月成立）の政策用に手がけた調査資料は一〇五三件。まさに、「満州国」を陰で動かす集団だった。

ところが、「満州国」の行政機構が整った昭和一〇年八月になると、満鉄は関東軍から強引に付属地と行政権を奪われ、鉄道・鉄鋼事業に特化させられる。

この頃、満鉄の調査部にいた石堂清倫（戦後は評論家）によれば、「関東州内は軍人の勢力が大きくなく、官僚も満鉄には一目置いていたから、日本内地には見られなくなった『自由』が残っていた。満鉄刊行の文書は誰も検閲しないような一種の真空状態があった」（『よそものの外地』）という。

それゆえ、特に調査部の社員には左翼もいて、憲兵隊が部員を検挙する「満鉄事件」が昭和一七年と翌一八年に発生。調査部は事実上の解体を迫られていった。

「満鉄の業績の中で、特筆すべきは宮崎正義（戦後は日本経済復興協会常務理事）ら調査部員の業績でしょう。日満を融合した自給自足経済を計画した宮崎は、現在の日本型経済システムの原型――重要産業を統制し、ほかは競争にゆだねる官僚統制の資本主義――を提言し、実際にそれらは『満州国』の官僚によって具体化。さらに日本に移植され、官僚主導型経済へ引き継がれます。高度経済成長をもたらした『日本株式会社』の原型は人、政策ともに満鉄にあるのです」（小林氏）

満鉄の閉鎖が決定したのは、終戦後の昭和二〇年九月三〇日。最後の総裁・山崎元幹は、日本人社員一三万八八〇四人全員が日本に引揚げるまで大連に残り、満鉄の幕引きを見届けたという。

結局、一万七〇〇〇キロの鉄道、鞍山製鉄所といった工業設備、港湾・学校など、満鉄の膨大な施設は中国に継承された。そして少数ながら、中には中国にとどまって技術を伝える社員もいた。その一人、丸沢常哉（元中央試験所所長）は若い中国人研究者に触媒研究を伝授し、中国の化学工業の発展を支援したのである。

▲奉天の東45キロにある撫順炭鉱。「黒いダイヤの無尽の宝庫」と言われ、大正13年から始められた露天掘りにより、年間960万トンにおよぶ、驚異的な産出量となった。

◀明治四二年八月、中国大陸と朝鮮半島を直結する幹線として、戦略的にも重要な安東―奉天間の軽便鉄道で、広軌改築を強行した。

［満州写真大観］

▲当時の食堂車内部。直通運転による輸送量増強をめざし、全線を広軌へ統一する一方、2000両以上の車両が、米国から輸入された。

"人材の宝庫"だった満鉄の調査機関

満鉄は、調査機関として「調査部」（大連）と「東亜経済調査局」（東京支社）を設置。松岡参太郎京都大学教授を「調査部」の責任者に、独・ダンツィヒ高等工業のチース博士を情報整理の専門家として招いて活動を開始すると、その後もさまざまな人材を組織に取り入れ続けた。

第1次世界大戦以降にふえた東京帝国大学（現・東京大学）卒の入社組には、波多野鼎（戦後は農相）や伊藤武雄（戦後は日中友好協会の創設者）などがおり、ロシア革命の最中にペテルブルグ大学を卒業した宮崎正義も、将来のロシア専門家として大正6年に満鉄入りしている。翌大正7年には、国家主義者で、後に東亜経済調査局の最高顧問になる大川周明（戦後はA級戦犯容疑で逮捕）が入社した。

このほかにも、同盟通信社（現・共同通信社）に転じることになる松方三郎や水野正直、三菱経済研究所（現・三菱総研）の基礎を築く佐倉重夫、戦後に歌手として名声を博した東海林太郎などが、調査部に在籍していたことが知られている。

▲大川周明は、大正・昭和時代の日本ファシズム運動の指導者として著名。

宮崎正衛／小学館提供

▲宮崎正義。満鉄・ロシア班の班長で、「経済調査会」設立者の一人だった。

▶明治四二年、満鉄は、鞍山に鉄鉱石の大鉱区を発見、大正八年から溶鉱炉の操業を開始した。後に、国内の八幡に次ぐ大製鉄所へと発展した。

ロシア軍にも知れわたっていた「マツヤマ」

“文明国日本”をアピールするための厚遇あれこれ

日露戦争捕虜六〇〇〇人の「松山収容所」抑留記

▲明治37年8月14日に蔚山沖海戦で撃沈された「リューイック号」の兵士たち。604人のうち、負傷していない372人は、松山から姫路に移送された。

日露戦争中に、国内には八万人ものロシア人捕虜が送られてきた。日本政府は、彼らを丁重に取り扱った。「野蛮な国」のイメージを払拭し、文明国と認知させたかったのである。中でも「マツヤマ」の名は、ロシア軍にも知れわたっていたほどである。それは、悲願の不平等条約改定に向けた日本政府の戦略でもあった。

捕虜は一等車で移送し出迎えの市長は三等車

明治三九年二月一六日午後六時半、松山市の高浜港から一隻の汽船が出航した。松山収容所にいた最後のロシア人捕虜の送還船であった。松山だけで、最盛期には六〇〇〇人を数えた捕虜たちは、明治三八年九月のポーツマスでの日露講和条約の締結後、一一月二〇日から次々と送還され、この日が最後だった。送還開始から三ヵ月たっていたためか、地元紙にも、次のベタ記事が載っただけだった。

「俘虜将校三二名、卒三八名つつがなく皆昨日午後六時三十分高浜発の汽船豊浦丸に乗せ宇品に送りしが（以下略）」（「愛媛新報」明治三九年二月一七日）

松山に最初のロシア人捕虜が到着したのは、明治三七年三月一六日のこと。二月の仁川沖の戦いで捕らえられた駆逐艦「ステレグシチー号」の四人であった。それ以降、松山には明治三八年六月まで、平均して四日に一度の割合で捕虜が送られてきた。しかも奉天会戦や日本海海戦直後には、一日二回到着することもしばしばだった。

日本全国には、樺太戦直後の最も多い時で約八万人（将官二四人、将校二二二人、下士官・兵七万七一二〇人）の捕虜が収容された。国内にこれだけの捕虜を抱えたのは、日本史上、最初で最後だった。第二次世界大戦時でも三万二〇〇〇人強だったのである。

捕虜は大阪、名古屋、福岡、熊本、習志野など全国三〇ヵ所に分散して収容されたが、その多くは軍の師団・連隊所在地で、周辺の寺院などが収容所にあてられた。松山の収容所も、寺院や公会堂など八ヵ所で構成されていて、将校を中心に六〇〇〇人強、全国でも中核的な収容所だった。ロシア兵の中には「マツヤマ」と叫びながら投降したものもいた。松山収容所はそれほど知れわたっていたのである。

日本政府は、捕虜の取り扱いについて慎重に配慮した。芳川顕正内相（六二）は国際条約（捕虜の人道的取り扱いを決めた明治三二年のハーグ万国平和会議で締結）に則した扱いをするよう、三七年三月に通達していた。静岡では最後の将軍、徳川慶喜の旧邸が収容所となり、松山では、到着する捕虜を市長・県高官が出迎え、夏目漱石で有名な「坊っちゃん列車」で港から市内まで移送したが、捕虜は一等車、市長らは三等車という気のつかいようだった。また、当時の大横綱、常陸山を収容所に立ち寄らせ、土俵入りを披露させるなどのサービスもした。慰問の金品のリストには、捕虜の肉親のものやロシア皇帝・皇后の名前にまじり、皇后（後の昭憲皇太后）からの義眼・義足・義手といった寄贈品も記録されている。

丁重に扱われたとはいえ、戦時下の敵兵士である。本国への手紙は、当然、検閲を受けた。しかも、ロシア語に堪能な

▶松山に、着いたばかりの戦傷ロシア人捕虜に、タバコ、ミカンのサービスをする日本の女性。

▶明治三八年五月の奉天戦で捕らえられたガネンフェルド少将を高浜港に出迎えた、松山俘虜収容所長・河野春庵大佐（左）。

▶松山へ送られる途中、長崎では人力車に乗り、市内観光をした。

係官は皆無に近い。そのため、ラブレターの中の「かわいい小鳩ちゃん」といった表現が暗号と疑われ、悶着が起きるなどの悲喜劇は随所に発生した。

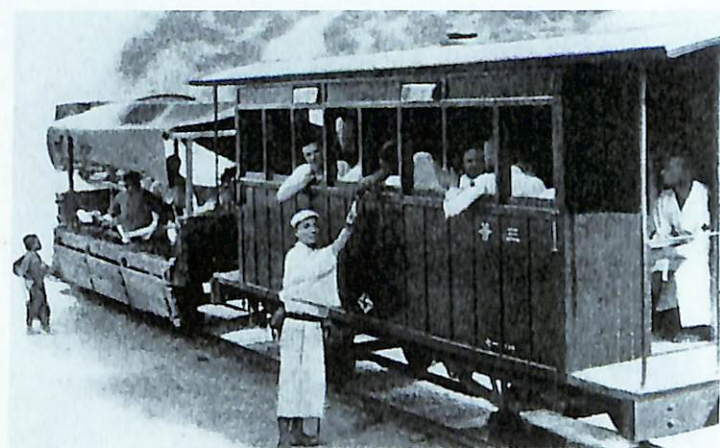
▲明治37年9月、伊予鉄道の好意で名所旧跡の見学会が行われた。伊予郡郡中町（現・伊予市）では宴会があり、ロシア軍将校は接待を受けた。

樺太での虐殺事件！「武士道」はあったか

大量の捕虜は、収容所周辺の経済に大きな影響を与えた。人口二万人の松山市に六〇〇〇人の捕虜が加わった。四人に一人がロシア人の町となったのである。

将校中心に集められた松山には、裕福な捕虜が多かった。そのため、長崎や神戸から外国人相手に手慣れた商人が進出し、繁華街の湊町にはロシア文字が氾濫し、「ロシア町」「長崎町」とも呼ばれたほど。町にはショーウインドーが出現し、呉服店や骨董店にもウイスキーやブランデーが並んだ。また、和菓子店は洋菓子店に変身し、洋食店やビリヤード場が林立した。明治三八年になり、外出や旅行制限が緩和されると、花柳界が大盛況をきわめた。店にはロシア人将校があふれ、締め出された松山市民から不平が噴出することもあった。結局、滞在した二年間に捕虜が消費した金額は、五三万円にのぼり、二〇〇〇円以上の利益を上げたものが三〇人も出現した。

市民は異国人捕虜に群がっていた。愛媛県警には、「収容所をのぞいた」り「捕虜を囲んで追いかけ」たりして、制止されたものが、捕虜の滞在期間中に約二八万人、「金銭をせびったり、俘虜の投ずる金銭を拾おう」としたものが約一五〇〇人、などの記録が残っている。

日本の捕虜対策の歴史は、世界的な流れと逆行するとされていた。つまり世界的には、時代が下るにしたがい捕虜は虐待される存在から保護の対象となる。しかし、日本は日清・日露両戦争から第一次世界大戦まで、捕虜を厚遇し、第二次世界大戦では虐待に転じた、とするのがこれまでの通説だった。明治時代の日本が、捕虜厚遇を通じて〝野蛮で遅れた国〟というイメージを文明国へと転換させ、日露戦争の戦費用の外債の償還促進や、有利な講和の獲得、さらに不平等条約改正をも企図していたことは事実である（不平等条約は明治四四年以降、順次改正）。

▲「坊っちゃん列車」に乗る捕虜傷兵と、交歓する市民。

だが、明治の日本軍には「武士道」が残されていたとする見方には、それをくつがえさざるを得ない新事実がある、と前置きして、茨城大学の大江志乃夫名誉教授は、次のような事例を紹介する。

「日露戦争の最終段階の樺太（サハリン）で、日本軍が、投降した一八〇人のロシア人捕虜を、翌日、全員銃殺したと書いた新屋新宅という兵士の手紙があります。この部隊は、直前の任務が捕虜の護送。捕虜の扱いを熟知していたはずです。司馬遼太郎さんは、当時の日本軍には〝武士道〟の精神があったとされていますが、この事実を知ったら認識が変わったのではないでしょうか。また、芳川内務大臣の名で、国際法を遵守せよ、との注意を与えたのは、こうしたことが行われていたためとも考えられるのです。

上級司令部の目が届かないところで、こうした凶行を犯してしまう体質がすでにこの頃から日本軍にはあったと言えるでしょう」

◀将校には自由散歩のほか、市内に限り、同伴家族との民家への居住が認められた。

女たちの肖像

流行語にもなった「美顔術」化粧品に器具に発揮された遠藤波津子のアイディア！

稲葉真弓

フェイシャル・エステとして知られる美顔術が生まれたのは、石井研堂の『明治事物起原』によれば、この年、明治三九年夏のこと。東京・京橋の「理容館」（遠藤理容館を経て現・遠藤波津子美容室）の遠藤波津子（四四＝本名・ハツ）が考案したものである。波津子の美顔術は、近代美容のお手本として後々までその技術が継承されていくことになるのだが、女性にとっては、まさに「美の暁」のスタートだった。

彼女の提唱した美顔術は画期的なものだった。それまで日本女性の間で一般化していた白粉を塗りたくる化粧に異を唱え、まず美の基本は精神の健康が第一と説き、素肌美を生かす化粧をめざしたのである。

これが女性の間でウケにウケた。明治四二年頃には、「美顔術」なる言葉が「東京朝日新聞」に登場、「ハイカラではないか」とその技術を紹介している。店には華族、政財界人、上流階級の子女が押し寄せ、四三年には流行語として全国を席巻した。

▶洋式美容室第一号の後、美容全般に事業拡大。

遠藤波津子グループ提供

波津子が美顔術に乗り出したのは、進取の気性に富んだ夫の影響があった。

文久二年（一八六二）、現在の神奈川県湯河原町に生まれた彼女は、遠縁の旅館を手伝うために一五歳で上京、明治二一年、二六歳で遠藤芳之助と結婚した。三〇年、芳之助が京橋にビリヤードの店「日勝亭」を開業、事業視察のため渡米したが、この時見た海外の美顔術によほど驚いたのだろう、妻に話したのが、彼女の天分を目覚めさせたのである。さっそく、横浜・居留地のドクター・キャンブルーに西洋美容法を学んだ彼女は、開業後、これを「美顔術」と命名した。

明治三八年開業の「理容館」は、着付け・化粧専門の美粧部と結髪部に分かれていた。美粧部を受け持った波津子は、化粧水や美顔術用のクリーム、器具などを次々と考案。今やおなじみのマッサージローラーや、老廃物を吸引するカップなどは、どれも彼女のアイディアから生まれたものである。また彼女は、着付けの天才としても知られ、ラジオ結びなど斬新な帯の結び方を発表、女性ファンを広げていった。

大正一四年、「東京婦人美容協会（後の日本婦人美容協会）」を設立。「髪結」と言われた美容界の女性の地位向上と近代化につとめたが、昭和八年、自動車事故で死去。現在の「遠藤波津子」は四代目にあたる。

勝者・敗者

過熱しすぎた応援合戦！「虎髯弥次将軍」吉岡信敬 早慶戦中止の事態を招く

阿部珠樹

野球の早慶戦は、明治三六年から始まった。まだ珍しい対校試合ということで、選手ばかりか、応援する学生も異様な盛り上がりを見せ、応援合戦は過熱した。それがピークに達したのは、この年、明治三九年秋のことだった。

一回戦は、早稲田グラウンドに乗りこんだ慶応が勝利をおさめる。続く二回戦は、前年のアメリカ遠征で大活躍した早稲田の投手、河野安通志（二二）が三振一三個を奪う力投を見せ、三対零で早稲田が雪辱をはたした。さあ、次は決勝の三回戦だ。誰もがそう思ったところで、三回戦は、両校の塾長、総長の話し合いにより突然中止になってしまった。

理由は応援の過熱である。特に問題視されたのは、早稲田の応援団の指揮をとった吉岡信敬（二一）のふるまいであった。

学生にもかかわらず、顔中に髯をたくわえた吉岡は、「虎髯弥次将軍」の異名をとり、乃木大将、東郷元帥と並んで〝三大将軍〟などと呼ばれる暴れん坊だった。この吉岡は、慶応のグラウンドで行われた二回戦には、なんと馬に乗って会場に乗りこみ、馬上から刀を振るって、学生をあおりにあおったなどと伝えられている。

しかし、明治時代の野球に関心の深い作家・横田順彌の『明治不可思議堂』によると、さすがの吉岡も、馬にまたがってグラウンドに乗りこむようなことはなかったという。つまり、あまた伝えられる「虎髯弥次将軍伝説」のひとつだったと言うのだ。

だが、そんな伝説が作られるほど、学生たちの応援合戦が過熱したのは事実で、何かあってはいけないと案じた両校の関係者が先手を打って、生まれたばかりの早慶戦中止という挙に出たのが真相のようだ。

一時的な処置と思われたこの中止だが、意外に長引き、なんと、この後一九年間も早慶戦が行われることはなかった。そして再開されてからも、応援の熱気はすさまじく、試合の後、銀座・新宿などで大さわぎして、世のひんしゅくを買うことが珍しくなかった。

▶名物団長・吉岡信敬（中央）。バンカラを絵に描いたようだった。

1月

「イリュストラシオン」

▲ドイツのモロッコ進出阻止（1月16日）スペインのアルヘシラスで開かれた国際会議で、モロッコの独立を決議。前年、第1次モロッコ事件を起こしたドイツの野望はくじかれた。

毎日新聞社

▲第1次西園寺公望内閣が誕生（1月7日）講和問題で国民の反対を予想した桂太郎が、政友会と妥協して政権交代。実質上の〝桂園時代〟の開始である。

▶陸軍軍医部長・森鷗外（43）、帰還（1月12日）日露戦争から、1年9ヵ月ぶりに故国の土を踏んだ。陣中で折折に詠んだ歌は『うた日記』にまとめられた。

▲野口遵、鹿児島に曾木電気設立（1月12日）翌年には日本カーバイド商会を設立、翌々年、両者を合併して日本窒素肥料とし、熊本県水俣に移る。一大コンツェルンの始まりだった。

▼乃木希典大将（56）、凱旋（1月14日）新橋駅から宮城までパレード。旅順要塞を陥落させた第3軍司令官を、市民は熱狂的に迎えた。死傷者約6万人という大きな犠牲は不問に。

「イリュストラシオン」

▲モスクワ市街戦、終結（1月1日）前月、ソビエトの蜂起呼びかけに応じた労働者が次第に武装化、激しい市街戦が続いたが（写真）、近衛連隊が出動し、12日ぶりに鎮圧。

明治39年1月

1（月）●足尾銅山の大日本労働同志会が改組、新たに日本鉱山労働会を結成。
2（火）●丙午のこの年、初の午の日にちなみ、京浜電車では車体をイルミネーションで飾る。
3（水）●「朝日新聞」、賞金三〇〇円の懸賞小説を募集。
4（木）●秋田・院内鉱山で出火、作業員一〇〇人死亡。
5（金）●東京・永田町の閑院宮家から出火。
6（土）●横須賀海軍工廠第四ドック、開渠式。
7（日）●第一次西園寺公望（政友会総裁）内閣誕生。
8（月）●逓信省、郵便振替貯金規則を公布。
9（火）●英仏間で対独軍事協力について協議開始（独の対仏宣戦布告には、英に「信義上の義務」）。
10（水）●日露戦争後初の露新聞記者が来日、と新聞に。
11（木）●露・社会革命党（エス・エル党）が第一回大会開催。綱領採択。
12（金）●野口遵、曾木電気を設立（明治41年、日本窒素肥料と改称し、日窒コンツェルンを築く）。
13（土）●文部省が高等小学校教科書用の新体詩を募集、と新聞に。題は「進取の歌」。
14（日）●樋口伝・西川光二郎ら、日本平民党結成。
15（月）●産業振興のための興業仲介所が開設（商・工・農・水産各事業の営業相談などを行う）。
16（火）●スペイン・アルヘシラスで国際会議開催（〜4月7日。モロッコ独立など決議）。
17（水）●独・ハンブルクで初の大衆的政治ストライキ。
18（木）●仏、ファリエールが新大統領に就任。
19（金）●新聞大同盟大会、東京・芝公園で開催。桂太郎前内閣による新聞弾圧の責任追及を決議。
20（土）●横浜電鉄の車掌・運転手ら、増給要求スト。
21（日）●「中外商業」、新聞初の二ページ見開き広告掲載。
22（月）●日露戦の戦利船「アムール」が佐世保に入港。
23（火）●大相撲で全勝優勝の常陸山、自宅で祝勝会。
24（水）●福島で仏教救済会結成、全国仏教徒に呼びかけ凶作地窮民援助の義捐金募集、と新聞に。
25（木）●「新平民」の身分が理由の巡査不採用は不都合、と岡山の男性が衆議院に請願書提出。
26（金）●駐露日本公使館が再開（本野一郎公使が着任）。
27（土）●東京・新橋駅、第一師団長凱旋式で大にぎわい。
28（日）●堺利彦・深尾韶ら日本社会党の結社を届け出。
29（月）●駐仏日本公使館、大使館に昇格（栗野慎一郎を駐仏大使に任命）。
30（火）●陸軍省、日露戦で日本軍が最も善戦した三月一〇日を陸軍記念日に制定、と新聞に。
31（水）●東京・浅草で大火、四〇〇〇戸以上焼失。

ニュース・ファイル 1906

フォト＋日録で再現する365日

日本の鉄道史上、重要な出来事が二つあった。民間一七社を買い上げる鉄道国有法の公布、そして、中国大陸進出の拠点となった南満州鉄道（満鉄）の発足も、この年のことである。一方、韓国には統監・伊藤博文が着任し、抗日闘争の高まる中、保護国化政策を強行した。

◀満州に関する日清条約公布（1月31日）安東－奉天間の軍用鉄道の経営など、日本のロシア利権引き継ぎに関して清国が承認。写真は、前年12月22日、北京での両国調印直後。中央が日本全権・小村寿太郎外相。
「イリュストラシオン」

「近事画報」

▲**前田侯爵家の古式ゆかしき婚礼（2月19日）**加賀百万石の往時さながら、床に飾りものをしつらえ、利為夫妻（左）と媒酌の徳川家達公爵夫妻は正装。

◀**日本社会党結成（2月24日）**日本平民党と合併し、社会主義者35人が参加。前列右から堺利彦、樋口伝、深尾韶、幸徳秋水、後列中央、大杉栄。

「帝国画報」

▶**河原操子（30）、無事帰国（2月11日）**日露開戦前に内蒙古へ発ち、カラチン王室教育と軍事秘密情報員の任をはたした。この年、結婚。後ろは内蒙古留学生。

▶**松旭斎天一（52）、神技の「水芸」（2月）**欧米各国公演で磨きあげた奇術を、東京・本郷座で披露、大好評を博した。写真中央が天一、その左に立つのは美貌の弟子・天勝（19）。

「帝国画報」

▼**世界最大の戦艦「ドレッドノート」進水（2月10日）**英国海軍建造の総排水量1万7900トン、全長161メートル、幅25メートル、30センチ砲10門の怪物。大艦巨砲時代の先駆となった。

毎日新聞社

▶**コンノート殿下、来日（2月19日）**同盟国・英国が戦勝を祝い、天皇にガーター勲章を授与するため、ビクトリア女王の3男を派遣。写真は、翌月訪れた鹿児島の西郷隆盛の墓前で（前列中央）。

明治39年2月

1（木）●韓国統監府および理事庁、開庁（3月2日、統監・伊藤博文、着任）。
2（金）●大阪市、電気鉄道課を新設。
3（土）●高村光太郎、欧米留学に出発（明治42年帰国）。
4（日）●東京・石川島造船所の労働者七五〇人、賃上げを要求しスト（〜7日、不貫徹）。
5（月）●鹿児島県庁から出火、民家二〇〇戸余類焼。
6（火）●矯風会、在外国売春婦取締法を衆議院に提出。
7（水）●満州（中国東北部）経営問題につき首相官邸で第一回委員会。
8（木）●韓国駐在の各国全公使館が閉鎖、撤退終了。
9（金）●駐韓日本憲兵の行政・司法両警察掌握を公布。
10（土）●世界最大戦艦、英「ドレッドノート」（全長一六一メートル）が軍港・ポーツマスで進水。
11（日）●普通選挙全国同志大会、東京で開催（20日、衆院に嘆願書提出）。
12（月）●臨時事件費支弁に関する法律改正公布。事件費の不足補充に大蔵省証券発行を規定。
13（火）●歩行者の左側通行厳守など、車馬の衝突防止に関する警視庁諭告一一ヵ条が新聞に。
14（水）●新潟に大雪。柏崎付近では汽車が雪に埋没。
15（木）●韓国統監府、統監旗を制定公布。
16（金）●英・労働代表委員会、労働党と改称。
17（土）●坪内逍遙・島村抱月ら、文化運動団体として文芸協会創立、東京・芝で発会式。
18（日）●白馬会などの画家がモデルを占有、と新聞に。
19（月）●英国皇族・コンノートが国賓として来日、天皇に国王からのガーター勲章を奉呈。
●大阪・金巾・三重などの五紡績会社が日本綿布輸出組合を結成。綿布の満州輸出を促進。
20（火）●大蔵省、公債二億円発行規定を公布。
21（水）●靖国神社に祀られていない日露戦争の戦死者は今なお三万人、と新聞に。
22（木）●造営中の東宮御所、大食堂の装飾は本邦工芸の粋を集めた華美なもの、と新聞に。
23（金）●代議士約三七〇人中、人力車利用者はわずか七〇人、大多数は電車を利用、と新聞に。
24（土）●日本平民党・日本社会党が合同、第一回日本社会党大会開催。
25（日）●大阪商船、大阪—天津間の航路開設。
26（月）●東海道線の三等急行に食堂車開始、と新聞に。
27（火）●米婦人・フェルプス、仙台市に東北育児院創設。
28（水）●臨時閣議、鉄道国有法案を決定（3月3日、政府は同法案を衆院提出、27日成立）。

◀▲**魯迅（24）、仙台医学専門学校中退（3月）**官費留学生として来日し、医学を学んでいたが、志を文学に転じた。写真上は恩師・藤野先生と「惜別」の写真。左は送別会で（前列右）。

▼**帝国図書館開館（3月20日）**東京・上野に白亜の殿堂が落成。設計・真水英夫。計画の4分の1だけ竣工し、現在の国会図書館上野支部に。写真は、祝典が行われた4階閲覧室。

「近事画報」

▼**東北凶作地の孤児救済（3月21日）**大飢饉のため、親から見捨てられた242人が、東京・神田の篤志家宅を経て（写真）、プロテスタント・石井十次設立の岡山孤児院に向かった。

「近事画報」

▶**鉄道国有法公布（3月31日）**私鉄乱立が軍事輸送に支障をきたすと、陸軍が推進。17私設鉄道の4543キロを国有化、あわせて英国製蒸気機関車2120型（写真）を258両輸入した。

▼**台湾中部・嘉義地方で大地震（3月17日）**新店尾街、四川内街、新港市街などがほぼ壊滅。死者1110人余、家屋全壊4200戸以上に達する大被害となった。4月14日にも、再び強震に襲われた。

「太陽」

「帝国画報」

◀**華族女学校、最後の卒業生（3月）**4月から学習院に合併され、学習院女学部になった。明治18年、華族の女子教育に対する強い要望にこたえて東京・四谷仲町に開校。その開校精神は継承された。

明治39年3月

1（木）●憲政本党、兵役三年制を二年制に改める案を衆議院提出（13日、否決）。
2（金）●関西美術院、開院式（院長・浅井忠）。
●非常特別税法改正公布。平和克復の翌年までの期限を削除、以後も増税を継続。
3（土）●加藤高明外相、鉄道国有法案に反対し辞職（首相・西園寺公望が外相兼任）。
4（日）●日露戦争で欠航していた日本郵船のウラジオストク航路が神戸出航で復活、と新聞に。
5（月）●漫画雑誌「東京パック」、朝日新聞に世界の一等国にふさわしい雑誌、と広告掲載。
6（火）●西園寺首相、鉄道国有法案提出の理由を説明（寺内正毅陸相は軍事上絶対必要と力説）。
7（水）●米・カリフォルニア州、日本人移民制限を決議。
8（木）●韓国へ綿布輸出の三栄組、三井に販売委託。
9（金）●日本初の石油発動機装備船「富士丸」、進水。
10（土）●仏・クリエール炭鉱で大爆発、一二〇〇人死亡。
11（日）●東京・日比谷で市電値上げ反対市民大会（15日、デモ隊が電車など襲撃、軍隊が鎮圧）。
12（月）●東京砲兵工廠製ダイナマイト、試験に成功。
13（火）●臨時軍事費予算四億五〇四五万円追加を公布。
14（水）●洗濯業の白洋舍が東京・日本橋呉服町に開業。
15（木）●初の社会主義研究誌「社会主義研究」創刊。
16（金）●英でロールス・ロイス社設立。
17（土）●台湾・嘉義地方に強震、一一一〇人余死亡。
18（日）●日本独自の無線電話発明者・木村駿吉のプロフィール・発明までの経過などが新聞に。
19（月）●英駐日大使、外相に満州における通商妨害について抗議、門戸開放申し入れ。
20（火）●東京・上野に帝国図書館（上野図書館）開館。
21（水）●露が日本酒の輸入を禁止、と新聞に。
22（木）●明治三五年で中断した三井・三菱・郵船三社による隅田川のボート競漕が復活、と新聞に。
23（金）●警視庁、東京市内三電車の値上げ申請を却下。
24（土）●官営八幡製鉄所の第一期拡張費一〇八八万円が衆議院で可決（27日、貴族院も可決）。
25（日）●島崎藤村、『破戒』を自費出版。
26（月）●大日本麦酒設立（日本麦酒など三社が合併）。
27（火）●衆院、鉄道国有法修正案をめぐり乱闘騒ぎ。
28（水）●長崎・高島炭坑でガス爆発、約三〇〇人死亡。
29（木）●米国から東北凶作地への寄贈小麦が横浜到着。
30（金）●塩専売法改正。鹹水（海水）に専売規定適用。
31（土）●鉄道国有法公布。日本鉄道ほか国内一七私鉄買収を定める（翌年10月1日、買収完了）。

毎日新聞社

▲初の海軍記念日(5月27日) 日露戦争の命運を決した、日本海海戦開始の日を記念日と制定。陸軍は奉天入城の3月10日。写真は、横須賀海軍工廠での祝賀会。

▲一高対三高の野球、始まる(4月6日) 前日、早稲田と接戦の三高に期待が集まり、一高校庭は1万5000人の超満員。1点差で一高の勝利。写真は後のもの。

毎日新聞社

▼陸軍が凱旋大観兵式(4月30日) 祝砲が轟く中、東京・青山練兵場に大山元帥以下将兵が集結、天皇の督励の勅語を受けた。写真は、地上500メートルの気球上から撮影。

「日本歴史写真帖」

◀南海鉄道に列車食堂(4月) 難波─和歌山市間の急行蒸気列車の、1等車両半分をビュッフェに。12月の直営化で採用された接客女性は「美人桜」と大評判。

「南海人」

▶ベスビオ火山大爆発(4月6日)「ポンペイ最後の日」で知られるイタリアの活火山が、34年ぶりの大活動。マグマの噴出で山容が大変貌。写真は、東麓の街・ボスコトレカゼ。別荘が溶岩で埋まった。

▲「血の日曜日事件」の報復(4月11日) 労働運動指導者・ガポン神父を、社会革命党員が暗殺。前年1月の「事件」は、秘密警察に通じた神父の陰謀とした。

「イリュストラシオン」

明治39年4月

1(日) ●美津濃商店(現・ミズノ)、大阪で創業。●第五高等学校工学部を分離独立し熊本高等工業学校を設置(高等学校の専門学科は解消)。
2(月) ●御用船解除の横浜港、民間船で満杯、と新聞に。
3(火) ●中山太陽堂、クラブ洗粉を発売。
4(水) ●徳富蘆花、トルストイ訪問のため横浜出発。
5(木) ●初の国産潜水艇「第六号艇」(川崎造船)、竣工。
6(金) ●輸出羽二重精練業法を公布(昭和2年廃止)。
7(土) ●官・国幣社の経費を国庫負担と定める。
8(日) ●花柳病予防会、第一回会議を開催。娼妓健康診断の方法・公立娼妓病院の是非などを議論。
9(月) ●最新・大型軍艦「生駒」、呉軍港で進水式。
10(火) ●東京市内でニセ札行使事件が頻発、と新聞に。
11(水) ●宮内省、華族女学校を学習院に併合。
12(木) ●駐米代理大使・日置益、米国務長官に、日本は満州の門戸開放を尊重すると通告。
13(金) ●徴兵令が改正され、韓国・中国・香港などの在留邦人の徴兵猶予が廃止になる。
14(土) ●台湾・嘉義地方で大地震、全半壊一〇〇〇戸。
15(日) ●西園寺首相、大蔵次官・若槻礼次郎と満州の軍政視察に出発。
16(月) ●東海道線、新橋─神戸間に最急行列車運転(急行料金の初め、所要一三時間四〇分)。
17(火) ●韓国統監府が保安規則制定。治安取締を規定。
18(水) ●米国・サンフランシスコ市で大地震。市の三分の二を焼失、死者約一〇〇〇人。
19(木) ●宮崎民蔵・相良寅雄、土地復権同志会の同志獲得のため全国巡歴を開始。
20(金) ●国定教科書の解答書発行は違法、と新聞に。
21(土) ●東京地裁、日比谷焼き打ち事件(明治38年)の被告・河野広中ら一一人に無罪判決。
22(日) ●オリンピック開催一〇周年を記念し、アテネで国際競技会開催(~5月2日。非公式)。
23(月) ●大蔵省、税法審査委員会を設置。
24(火) ●海軍省、捕獲船の払い下げ入札を実施。
25(水) ●桜井忠温、『肉弾』刊(大ベストセラーに)。
26(木) ●東京・新宿御苑の行幸門ほぼ完成、と新聞に。
27(金) ●英清両国がチベット条約に調印。英はチベットの領土不併合、内政不干渉を保障。
28(土) ●伊・ミラノで国際交通博覧会開催。
29(日) ●戦勝記念絵はがき・記念切手を発売。東京市内の郵便局は大混雑(5月6日も同様)。
30(月) ●征露凱旋陸軍大観兵式、東京・青山練兵場で挙行。近衛師団など一七師団が参加。

証言・あの日この日
森峰子(59)

1月12日(金)〈汽車の窓に林太郎の顔見へ(え)、皆おし合てのぞく。一寸物(もの)をいふ。汽車より出て宮内省より参りたる馬車に乗りて参内。新橋より停車場まて(で)の間、旗と人の頭ばかり。馬車の数は十二台にて外は人力車。終(ひ)の馬車に林太郎のる。自身は於と久子と電車にのり上野に帰り、車にて帰宅。馬丁も従卒も皆無事帰宅〉(山崎国紀編『森鷗外・母の日記』)

日露戦争に軍医部長として従軍していた鷗外は、この日、新橋駅に凱旋帰国した。鷗外の母・峰子は、鷗外の長男・於菟らを連れて新橋に出迎えるが、そこには鷗外の妻・志げの姿はなかった。この頃、嫁姑関係がうまくいかず、志げは実家に帰ったままだった。お祝いの客が引き上げた後、夜11時すぎてから、母に勧められ、鷗外は徒歩で、芝の妻子のもとへ向かった。(山崎行太郎)

『警視庁百年の歩み』

▲日露戦勝記念絵はがき売り出し(5月6日) 絵柄は、陸軍凱旋観兵式、海軍凱旋観兵式、伊勢大廟と靖国神社、の3種で一組20銭。写真は、東京・京橋郵便局前の午前6時の長蛇の列。

毎日新聞社

◀札幌に百貨店・五番館オープン(5月) 種苗・農具を扱う札幌興農園が、札幌駅前に赤煉瓦の店舗を新築。洋品雑貨も販売した。写真は明治42年頃。45年にはデパートを名乗る。

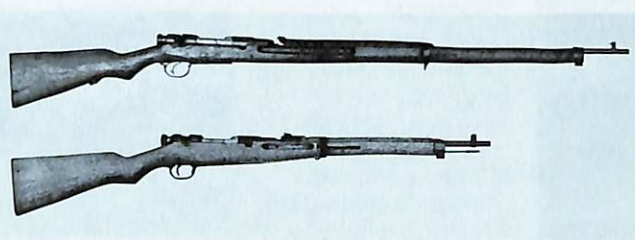
CORBIS-BETTMANN/PPS

▲ロックフェラーの不服申し立て棄却(5月15日) スタンダード石油の市場独占に、アンチ・トラスト法が適用され、不服申し立ても却下。表向きだけ解散した。

毎日新聞社

▶三八式歩兵銃(上)・騎兵銃制定(5月5日) 日露戦争の主戦兵器・三〇年式銃が、砂ぼこりや低温に弱いので、改修。命中精度も高まり、第2次大戦終了まで主力。

▶シンプロン・トンネル、開通(5月19日) イタリア─スイス間を結ぶ、世界最長19.8キロの鉄道単線トンネルが貫通。写真は、ジュネーブでの開通式。

「イリュストラシオン」

明治39年5月

1(火) ●満州・安東(現・丹東)に領事館開館。
2(水) ●医師法・歯科医師法公布。免許が開業許可制から身分許可制となる。
3(木) ●山形・飽海郡北俣村で大火、一〇〇〇戸全焼。
4(金) ●沼津で電話線盗難、東京─大阪間一時不通に。
5(土) ●陸軍、三八式歩兵銃・騎兵銃を制定。第二次世界大戦終了まで日本陸軍の主戦兵器となる。
6(日) ●露、国家基本法発布(皇帝を専制君主に)。
7(月) ●薄田泣菫、詩集『白羊宮』刊。
8(火) ●議院法改正公布。衆議院の予算審査期限が一五日以内から二一日以内となる。
9(水) ●東京市、神田・京橋に尋常夜学校設立。
10(木) ●露で第一回国会開催。立憲民主党が最大多数。
11(金) ●日米間著作権保護に関する条約公布。
12(土) ●鳥島噴火(明治35年)の罹災者を祀る記念碑が東京・青山墓地に完成、除幕式。
13(日) ●日比谷焼き打ち事件の追悼会、東京で開催。
14(月) ●西園寺公望首相、満州・韓国視察から帰国。
15(火) ●内務省後援の盲唖院に三〇人入院、と新聞に。
16(水) ●北輝次郎(一輝)の自費出版本『国体論及び純正社会主義』が秩序妨害で発禁、と新聞に。
17(木) ●税法審査委、第一回会議(12月まで五四回)。
18(金) ●在日外国人宣教師の提唱で大日本平和協会設立。翌年、機関誌「平和」発行。
19(土) ●日韓協約に反対する閔宗植ら、挙兵して韓国・洪州城占拠(31日、日本軍が奪回)。●独、艦隊法修正案可決(弩級艦建造など)。
20(日) ●鉄道五〇〇〇マイル祝賀会、名古屋市で開催。●フランス総選挙、急進社会党が第一党に。
21(月) ●ウラジオストクに日本貿易事務館が開館。
22(火) ●首相官邸で伊藤博文ほか元老・閣僚会議。満州問題を協議し、南満州の軍政廃止を決議。
23(水) ●日本郵船、香港─バンコク航路開設。
24(木) ●臨時鉄道国有準備局が設置される。逓信大臣のもと、鉄道国有の準備事務を行う。
25(金) ●東京地方、晴天続きで青山・原宿など山手地区の井戸が渇水状態、と新聞に。
26(土) ●万国郵便条約に調印(翌年10月1日実施)。
27(日) ●本派本願寺所属の高輪中学校(東京)開校式。
28(月) ●不動産上の権利規定を沖縄県に施行。
29(火) ●東京市内、新橋・京橋・浅草ほか各所に建造された日露戦争凱旋門の取り払い開始。
30(水) ●川崎造船、上海出張所を開設。
31(木) ●スペイン国王、英・ビクトリア女王の孫と結婚。

「太陽」

▲**南山の「英霊」訪問（6月7日）**日露戦争初期、4387人もの死傷者を出した激戦の地を、伊東・野津両元帥ら一行が訪ねた。写真は、釈雲照律師による鎮魂碑前の読経。

「帝国画報」

◀**日露樺太境界画定の第1回会議（6月15日）**北緯50度以南の樺太を日本領土とした、ポーツマス条約の具体的詰めに入った。写真中列、左から二人目が日本全権・大島健一大佐。

▶**ル・マンで第1回ACFグランプリレース（6月26日）**1周104キロのサーキットを、2日間で12周、ルノーに乗ったハンガリー人・シスが、12時間46分26秒で優勝。

▲**渋沢栄一ら、韓国視察（6月）**前年11月の第2次日韓協約で事実上、保護国化した韓国を、日本財界のリーダーが視察。日本は綿布の輸出に力を入れていた。前列右から3人目が渋沢。

▶**徳冨蘆花、トルストイを訪問（6月）**内的な解脱を求める欲求が、パレスチナとトルストイに向かわせた。写真は馬車に乗るトルストイ（左）と蘆花（中央）。蘆花は、その感銘を『順礼紀行』につづった。

▼**国立伝染病研究所、竣工（6月）**東京・芝白金に煉瓦造りの殿堂が完成。コッホ研究所などと並ぶ世界的施設となった。写真は、北里柴三郎所長（前列中央）を囲んで。

「帝国画報」

明治39年6月

- 1（金）●奉天総領事館、開館。
- 2（土）●雪舟没後四〇〇年忌、元老・井上馨邸で開催。
- 3（日）●ドルフィンガー、六甲山上ゴルフコースで日本で初めてホールインワン達成。
- 4（月）●横浜市の左官職二〇九人、親方に賃上げを要求しスト（13日、妥結）。
- 5（火）●京都帝大に文科大学設置（9月11日開設）。
- 6（水）●小村寿太郎、駐英大使に任命される。
- 7（木）●共同火災設立（現・同和火災の前身の一部）。
- 8（金）●南満州鉄道（満鉄）に関する勅令公布。会社の構成など規定（7月13日、設立委員会設置）。
- 9（土）●牧野伸顕文相、学生の思想・風紀につき訓令。社会主義防止を初めて公言。
- 10（日）●森鷗外ら、山県有朋を囲む歌会・常磐会結成。
- 11（月）●中央東線の八王子─塩尻間全通、甲武鉄道ほかにより飯田町─長野間の直通列車運転開始。
- 12（火）●日本エスペラント協会、発会式（東京高商生徒・加藤節の運動による。大杉栄ら出席）。
- 13（水）●エジプト住民、英将校襲撃を理由に裁判に（「デンシワーイ事件」）。
- 14（木）●露のビアリストクでユダヤ人迫害事件起こる。
- 15（金）●樺太境界画定委員会、露と第一回会議を開催。
- 16（土）●警視庁、理髪店など非医師による眼の洗滌サービスを禁止。違反者は拘留または科料。
- 17（日）●御用商人の官省出入りが問題化。海軍省では一部をのぞき出入り禁止を掲示、と新聞に。
- 18（月）●東京・深川でネズミからペスト菌検出。
- 19（火）●栃木県、鬼怒川水力電気に設立許可（東京・横浜への電気供給が目的）。
- 20（水）●日本海で浮流水雷の被害頻発、と新聞に。
- 21（木）●明治大学、九月新学期に文学科新設と新聞に。
- 22（金）●江戸期から六三年勤続の消防頭に警視総監賞。
- 23（土）●加藤清正ゆかりの熊本名産・朝鮮飴を売る商店が東京・芝に支店開店、と新聞に。
- 24（日）●大隈重信、慶応義塾の三田商業研究会で講演し、島国・日本には商業が今後最も重要と力説。
- 25（月）●三井銀行、ロンドンのバークレーズ銀行と当座借越契約を締結（同行初の外国関係業務）。
- 26（火）●ル・マンで第一回グランプリ。優勝はルノー。
- 27（水）●大阪の銃鉄工場で砲身が破裂、七人死傷。
- 28（木）●幸徳秋水、社会党演説会で直接行動論を主張。
- 29（金）●私立哲学館大学、東洋大学と改称。
- 30（土）●欧米人旅行者の増加で東京の宿泊施設が不足、帝国ホテルでも増築を検討中、と新聞に。

「現場」を歩く 金木町

北津軽の「米騒動」の地にも今や凶作、飢饉の実感なし！

山本徹美

▲現在の郷倉。「大活劇は言語道断なる状況を呈」し、「警官も力尽き」、「無政府の状態を示せり」（「東奥日報」明治39年8月28日）と伝えられる。　但馬一憲

明治三九年八月二五日午前八時すぎ、青森県北津軽郡嘉瀬村雲雀野にある郷倉前に「老若婦女に至るまで、村内の者およそ四百名ほど」（「東奥日報」八月二八日）が集結、「米騒動」を起こした。

郷倉は、非常食用の籾米を備蓄するために設けられたものである。「五年に一度ずつ凶作に見舞われている」（太宰治『津軽』）と、言われるくらい、ここの住民は冷害、風水害による飢饉に苦しめられてきた。郷倉の中にある備蓄米は、いわば生命綱。歴史は古く、津軽藩では享保一一年（一七二六）藩令を発し、郷倉を設置。以来、農家一戸当たり毎年四俵を目安に籾米を郷倉に納めてきた。

明治三八年は歴史的な大凶作で、続く三九年も一反当たりの収穫が七升弱しか見こめない悲惨な状態だった。その状況下、工藤保治郎村長は郷倉内にある備蓄籾を米穀商に売却しようと決断、郡参事会の許可を取り付けた。村長はその売り上げを新田開発にあてる計画だったが、この独断専行に村民はこぞって猛反発。郷倉前での〝総決起集会〟となった。

村長が米穀商を連れて郷倉に到着、扉を開けると、村人たちが倉の中になだれこみ、一六〇〇俵の籾米をすべて搬出。荷車数十台に振り分け、各農家に均等に分配してまわった。警察は主唱者一二人を拘引したが、数百人が一斉に自首。結局、全員が懲罰不問に付された。

今も残る農民の「城」

嘉瀬を訪ねてみた。青森の穀倉地帯だけあって、広大な平野は見わたす限り水田。嘉瀬村は昭和三〇年に金木町に統合されたが、同町の水稲作付け面積は約一五〇〇ヘクタール。平成九年度の米の産出量は九七二二トンで、県内トップ。反収にして、明治三九年と比べると、約六〇倍だ。

「品種改良を重ね、米は冷害にさほど影響されず、安定供給されています。凶作に関する知識はありますが、実感はないですね。今や、米も量より質、味が重要で、新銘柄『つがるロマン』のキャンペーン中です」（金木町役場企画課）

凶作や飢饉の不安が解消されるとともに郷倉は消えてゆき、役場ではその所在も正確には把握できないという。郷土史の発掘と研究成果を冊子にまとめ、発表している「嘉瀬ふるさとを探る会」の木村治利会長（七一）に訊いてみた。

「嘉瀬の農民はたくましく、自意識と反骨精神が強かった。それが事件の背景にあるのでしょう。その一例に、昭和二三年、嘉瀬村では県内初の共産党村長・増田千代吉を誕生させています」

騒動のあった郷倉は、今も同じ場所に建っていた。地元小学校で校長を歴任した岩村金致氏（七四）が管理している。

「総檜の柾葺きです。築一〇〇年以上経っているのに、ほとんど、補修の必要がない」

農民がまさに命懸けで守り続けた郷倉。私は「城」を連想した。

東奥日報社

▲ワラビの根をつき、でんぷんを取る農民。この危機を乗りきるため、皇室の御料地内のワラビの採集を申し出ている。

ベストセラー
伊藤左千夫の純情小説『野菊の墓』が大好評！

この年の四月、伊藤左千夫の名作『野菊の墓』が刊行され、そこに描かれた、抗しがたい運命に弄ばれる若い男女の悲劇が、多くの人々の心を動かした。

満年齢で一三歳の少年と一五歳の少女との淡い恋は、まだその思いがどれほど深いものであるかもわからないままに、悲劇的な結末を迎える。少女がほかの男との結婚を強制され、そのあげくに、流産で命を落としてしまったのである。その原因は二人の仲を裂いた自分にあると自責の念にかられる少年の母の悔悟と、それを見て、いつまでも少女の死を嘆いてはいられないと考える少年……。正岡子規門下の歌人としても知られる、伊藤左千夫の純情小説だった。

また、五月に、薄田泣菫（本名・淳介）が浪漫詩人としての本領を発揮した詩集『白羊宮』が刊行され、注目された。「あえかなる笑や、濃青の天つそら、／君が眼ざしの日のぬるみ、／寂しき胸の末枯野につと明らめば、／ありし世の日ぞ散りしきし落葉樹は、／また若やぎの新青葉枝に芽ぐみて……」（「ひとづま」）といった抒情詩が集められていた。

◀『野菊の墓』（俳書堂、30銭）

一方、この年劈頭に、第二次の「早稲田文学」が創刊された。三年余のヨーロッパ留学から帰ってきた島村抱月が、総合芸術運動としての「文芸協会」を設立し、その雑誌活動として「早稲田文学」を復刊させたもの。目次には、抱月をはじめ、薄田泣菫、小川未明、饗庭篁村、坪内逍遙らが顔を並べた。そして、エッセイや作品を掲載する本欄と、論壇や文壇、音楽界などを客観的にとらえていく"彙報"の二本柱で編集された。この創刊号で島村抱月は、ヨーロッパの文芸思潮の流れを見わたす「囚はれたる文芸」と題する四十数ページにわたる論文を執筆、これを巻頭に据えて、新しい芸術を生みだそうとする意気の高いことを示した。

▲『白羊宮』（金尾文淵堂、1円）

日本近代文学館提供（三点とも）

◀「早稲田文学」（第2次、金尾文淵堂、20銭）

スターと名場面
新しい演劇の創造をめざし島村抱月、「文芸協会」設立！

「文芸協会」設立のリーダーは島村抱月だったが、その理論的・実践的支柱と目されていたのは坪内逍遙だった。賛助員としては、泉鏡花、黒岩涙香、幸田露伴、広津柳浪などが名をつらねた。

「文芸協会」の目的は、日露戦争後の「新興の国運に応じて我が文学、美術、演芸の刷新を図り、以て当代の文化を資けんが為、同志者相議して茲に文芸協会を設立す」というところにあったが、特に演芸分野では、旧来の舞台に代わる新しい演劇の確立をめざして、積極的な活動を展開した。研究会が重ねられ、この年の一一月には歌舞伎座で第一回公演が開かれたのである。この時の演し物は、「桐一葉」「ヴェニスの商人」のそれぞれ一部分と、創作オペラ「常闇」（東儀鉄笛作曲）で、すべて坪内逍遙の創作ならびに翻訳作品だった。

このうち「常闇」は、出演者一二〇人という大がかりなもので、人気のわりには採算が取れず、その後も苦戦が続き、二年後の明治四一年、「文芸協会」は公演を一回も持てず、ついに坪内逍遙みずからが陣頭指揮をとらざるをえなくなった。しかし、三九年から始まった若々しく熱意あふれる運動は、新しい演劇の誕生を予感させるのに十分なものがあった。

▲「文芸協会」第1回公演「常闇」の一シーン。

▶強引なまでに新しい運動を起こした島村抱月。

◀新しい運動の陰のリーダーだった坪内逍遙。

早稲田大学演劇博物館提供（3点とも）

モノ語り'06
「シッカロール」「ゴールデンバット」「クラブ洗粉」この年登場、今だに売れています！

▲育児の必需品が誕生した　この年、和光堂薬局（現・和光堂）が、後の超ヒット商品「シッカロール」を発売した。赤ちゃんのあせもやただれを防ぐ散布薬で、開発にあたったのは、東京帝国大学で日本初の小児科を開設した弘田長（つかさ）博士。商品名も、当の博士が、ラテン語の「乾かす」という言葉からつけたもの。発売当初は小規模家内生産だったが、品質の評判がよく、たちまち育児の定番商品となった。

▲輸入品に対抗して作られた化粧品　明治36年から化粧品雑貨卸業として開業していた中山太陽堂（現・クラブコスメチックス）が、この年4月、自社製品第1号の「クラブ洗粉（あらいこ）」を発売し好評を得た。当時普及し始めていた輸入石鹸が、肌あれを起こしやすいという欠点を持っていたため、これを防ぐ化粧品であるというところに、開発と販売のポイントをおき、成功したのである。また、その後中山太陽堂のシンボルマークとなる「双美人図形」も、同時に誕生、商標として登録された。

▶数奇な運命をたどったタバコ　現在もなお販売されている超ロングセラー「ゴールデンバット」が、この年発売された。もともと清国への輸出用として作られたため、商品名は英文でデザインされた。名前にちなんで使われた金色のインクは、真鍮が原料だったため、日中戦争が本格化した昭和12年には黄色に変えられ、昭和15年には商品名も「金鵄（きんし）」と改名されたが、昭和24年には金色の文字が戻ってきた。発売時、10本入りで4銭だった。

たばこと塩の博物館提供

▶日露戦争がビールのラベルを作った　明治21年にジャパン・ブルワリー（現・キリンビール）からドイツ風ラガービールとして発売されたキリンビールは、すでに高品質の国産ブランドとして定評を得ていたが、この頃、日露戦争凱旋記念として「キリン・ピルスナビール」を発売、話題を呼んだ。ラベルの麒麟（きりん）マークの下には「凱旋紀念」の文字が入っていた。写真は、ピルスナビール。

ドライクリーニング革命

日本人のライフスタイル史上、この明治39年は重要な意味を持っている。「白洋舎」が開業、洋服の洗濯が国内でできるようになったからである。この洋服クリーニング店の登場は、まさしく日本が洋装時代へ本格的に移行することを意味していたのである。

またクリーニング方式として、洋服にふさわしいドライクリーニングが可能になったことも、洋装時代の到来を背後から支えていた。写真は、当時用いられていた箱車の〝乾式洗濯〟、すなわちドライクリーニングの表示で、これがすでに一大セールスポイントだったことを示している。

五十嵐健治洗濯資料館蔵／奥村健太郎

▲もともとは輸入されたアイロン　和服を整える道具として江戸時代から使われていた〝火熨斗（ひのし）〟や〝こて〟とは別に、洋服のしわをのばすために幕末の頃に輸入されたのが、写真のような「炭火アイロン」。炭火を入れて熱を発生させるもので、明治から昭和の初期にかけてさかんに使用された。

五十嵐健治洗濯資料館蔵／太田公平

▼玩具でも飛行機に人気　夢の乗りものだった「複葉機」が、ブリキの玩具として発売された。この頃は、まだツメの折り曲げによる接合法はなく、接合はすべてハンダづけだった。また、内部には板ゼンマイでなく、針金ゼンマイを用いていた。操縦席がなく人物が羽根の上に乗っていたり、日章旗や英国旗などが飾られているのがユニーク。

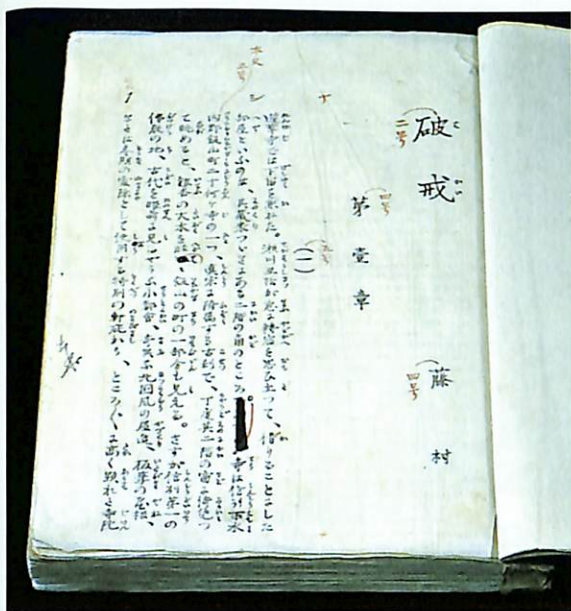
北原照久コレクション提供

▶この年一〇月に転居した浅草・新片町の家にて。二階に書斎があった。大正二年、フランス旅行に出発するまで、ここに住んだ。明治四一年撮影。 藤村記念館

人物クローズアップ

島崎藤村（三四）

詩の世界から散文の世界へ！ 「破戒」自費出版で地位を確立

◀「破戒」の原稿の冒頭部分。「蓮華寺では下宿を兼ねた」の第1行の新鮮さが話題となった。 北野美術館

明治三九年三月二五日、詩人・島崎藤村（三四）は長編小説「破戒」を、「緑蔭叢書」第一篇として上田屋から自費出版した。五〇〇円を超える大金（当時、警察官の初任給が一二円）を投じ、藤村が、文学者としての命運と人生のすべてを賭けて発表したこの書き下ろし小説の評判は高く、たちまち初版の一五〇〇部が売り切れ、三ヵ月間で四版を重ねるベストセラーとなった。

物語は、被差別部落出身の小学校教師である、主人公の瀬川丑松が、生きていくためには出生の秘密をあかしてはならぬ、という父の戒めに縛られながら、その理不尽な理由に悩み、みずからの理性によってそれを打ち破ろうと、理性と感情を闘わせる姿を追求した作品である。

藤村を力づけたのは、一般の評判に加えて、斯界の評価の高さだった。夏目漱石（三九）がこの作品を高く評価したことに加え、島村抱月（三五）も、この小説の新しさや問題性を好意に満ちた言葉で批評し、さらに、文壇はこの小説によって新たな回転期に達したことを感じる、とまで述べた。

詩の世界から散文の世界へ脱却すべく、藤村が「破戒」の構想を抱いてから四年余り、作品の成功によって、困窮をきわめていた藤村の生活苦は一気に解消した。そして藤村は、二年後の明治四一年四月から「東京朝日新聞」に連載される「春」によって独自の私小説的世界を切り開き、日本の自然主義文学を代表する作家としての地位を確立するのである。

島崎藤村は、明治五年二月一七日、筑摩県第八大区五小区馬籠村（現・長野県木曽郡山口村大字神坂）生まれ。本名は春樹。実家は、江戸時代中期から木曽街道馬籠宿の本陣と庄屋を兼ね、藤村の幼少時は馬籠の戸長をつとめていた。

明治一四年、兄・秀雄にともなわれて上京。二〇年、明治学院普通部本科に入学。在学中にキリスト教の洗礼を受け、二四年に同校卒業。翌二五年九月、明治女学校高等科英文科の教師となった。

その後、教え子を愛したために学校を退き、漂泊の後、文学への傾斜を強めながら、明治二九年、仙台の東北学院に作文教師として赴任。さらに三二年から三八年までの六年間を、信州・小諸にある小諸義塾の教師としてすごした。

藤村が、詩人として第一詩集『若菜集』を春陽堂から刊行したのは、明治三〇年のことである。さらに三一年の『一葉舟』『夏草』に続いて、第四詩文集『落梅集』を三四年に刊行、詩人としての藤村の名は揺るぎないものとなっていた。

しかし、藤村は詩から散文への転換をめざしていた。

「藤村はすでに評価の高い一流の詩人でしたが、本当にやりたいのは小説を書くことでした。明治三〇年に『うた、ね』という言文一致体の小説を初めて書いたんですが、これは、森鷗外に問題点を細かく指摘されています」

文芸評論家の剣持武彦氏はこう語る。

「春」に続いて藤村は、四三年から「読売新聞」に「家」を連載。その後も自己告白的な小説を書き続けた。

藤村が代表作『夜明け前』の第一部を新潮社より刊行したのは昭和七年、そして第二部が一〇年一一月に刊行された。幕末・維新の変革期に、父・正樹の生涯をたどる三〇〇〇枚にもおよぶこの大作は、昭和四年から「中央公論」に連載されたもので、その間一度の休載もなく執筆されている。

昭和一八年八月二二日、藤村は「東方の門」執筆中、神奈川県大磯の自宅で脳溢血により倒れ、翌二二日、息を引き取った。七二歳だった。

▲明治41年夏、両国川開きの日、浅草・新片町の写真館で。前列右から二人目より、妻・フユ、長男・楠雄、その左、抱かれているのは次男・鶏二。こののどかな写真を撮った2年後に、妻・フユが死ぬ。その後、藤村は、後列右端の姪・島崎こま子との「生きながらの地獄」の恋に苦悩する。

決定的瞬間

マグニチュードは推定八・三 震災後の大火災、略奪横行でサンフランシスコに戒厳令！

◀瓦礫の山と化した市街地。右上のノブヒルに立っていたフェアモントホテルも、外壁を残すばかりだ。手前、チャイナタウン。家を失い、公園で野宿した人も多かったという。

一九世紀のゴールド・ラッシュから数十年、二〇世紀初頭のサンフランシスコの人口は四〇万人余り。目抜き通りには煉瓦造りや木造の建物にまじって高層ビルが立ち並ぶ、米国・西海岸有数の大都市へと成長していた。

一九〇六年四月一八日、午前五時一五分。活況を呈するサンフランシスコの街の、すがすがしい早朝の静寂を引き裂くように、直下型地震が襲った。

ロサンゼルスからサンフランシスコにかけた西海岸一帯は、世界有数の大地震多発地帯として知られている。太平洋プレートと北米プレートがぶつかり合う境界にあたり、「サン・アンドレアス断層」と呼ばれる南北一二一〇キロにおよぶ大断層が走っていて、この大断層に発生した大地震は、過去一五〇年の間に三〇回以上も起こっている。

まだ記憶になまなましい一九八九年のサンフランシスコ地震も、そのひとつだ。多くの建物とともに、高速道路やサンフランシスコ湾に架かるベイブリッジが崩壊し、都市直下型地震のおそろしさをまざまざと見せつけられた衝撃的な出来事だった。

この年、一九〇六年の地震の激しさは、それをも大きく上回った。『ワールド・アルマナック』によれば、マグニチュードは推定八・三。阪神淡路大震災の七・二を大きく上回る大地震である。

商用でサンフランシスコを訪れていた東洋汽船総支配人の白石元治郎は、同市中心街にあるパレスホテル三階の客室のベッドの中で、この大地震に遭遇した。帰国後、その時の体験をつづった一文を「報知新聞」（同年五月一五日）に寄せている。

「なお寝台上に横たわりつつありしに、轟然たる響きとともに家屋は激しく振動して、あたかも洋上の船内にあるがごとく、すわ地震と思う一刹那、壁上の掛額はすさまじき音して墜落すと思う間もなく、四周の壁もまた落下し、婦人、小児の救いを求むる声物凄く……」

白石によれば、激しい揺れは断続的に三分間ほど続いたという。揺れがおさまったのを見はからって手早く身支度をすませ、ホテルの窓から市街の様子を確認した。木造や煉瓦造りの古い建物のいくつかが倒壊し、幾筋かの火の手が上がっていたものの、中心街の高層建築などは無事だった。その安心感もあってか、白石はホテル内の食堂に出向き、朝食をとる。大きな地震にもかかわらず、食堂はオープンしていた。少なくともホテル付近の人々の間には、被害は最小限ですんだという安堵感が広がっていた。

しかし、本当の災禍は、その後にやって来た。水道管が寸断されたこともあって、消火は進まず、白石がみとめた小さな火災は、あっという間に大火災になっていた。朝食を終えた白石が自室に戻った午前七時、みるみるうちに火の手は広がり、白石の宿泊するホテルに近づいていたのである。

白石は身の危険を感じ、荷物をまとめ、避難のため表に出る。その頃、通りは対岸のオークランドに逃れようとフェリー乗り場に向かう着の身着のままの市民であふれ、混乱の坩堝と化しつつあった。

その後、三日間にわたってサンフランシスコは燃え続け、市街の三分の二が灰燼に帰すことになった。結局、地震とそれに続く火災によって家を失った市民は、全市民の八割近い約三〇万人におよび、負傷者は数知れず、七〇〇人とも一〇〇〇人とも言われる死者を出すほどの大惨事となったのである。その中には五〇〇〜六〇〇〇人の日本人、日系移民も含まれていた。

▲最初の出火地点は、わずか12ヵ所だったが……。サクラメント通りから見た、延焼中のダウンタウン。 AP／WWP

同年五月一九日の「大阪毎日新聞」は、四月二〇日の「ニューヨーク・サン」紙の記事を引用して「同市はその郊外、海岸の数廓および金門公園（ゴールデンゲートパーク）に沿える中等社会の狭き住居道をのぞけば、他に残るものなし。米国都市にして未だかくのごとくほとんど破壊せられたるものなく、また地震は別とするも、その火災は恐らく米国歴史ありての最大のものたるを失わざるべし」と震災後の火災による惨状を報じている。

人々は、避難所暮らしを余儀なくされた。焼け残った建物の間を板で囲い、毛布などを敷いて寝起きする市民も多かった。略奪などの犯罪も横行したため、一時は戦時下並みの戒厳令下におかれ、軍隊が治安出動をして警備にあたるほどの状態になった。

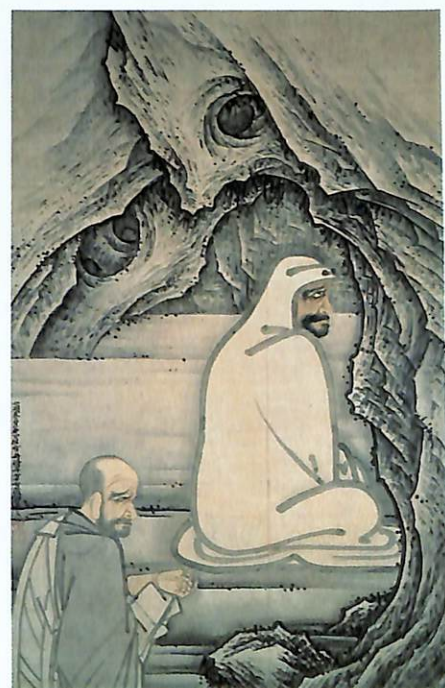
やがて、そうした混乱もおさまり、街は平静を取り戻していった。その後、世界中から援助の手が差し伸べられたこともあって、サンフランシスコの復興は驚くべき速さで進んだ。日本もまた、前年の日露講和交渉で仲介役をはたしてくれたアメリカに対する恩返しもあってか、壊滅的な打撃をこうむったサンフランシスコに対して二五万ドル（当時のレートで五〇万円）の義捐金を贈っている。

この大地震から約一〇年後。第一次世界大戦による戦争特需もあって、サンフランシスコは造船を中心に大地震の直前を上回る活況に沸き、街はさらに大きく発展し、一九二〇年代にはその絶頂期を迎えることになる。

その頃、太平洋の向こう側の日本の地下深くでは、約一〇万人の死者を出す関東大震災をもたらす不気味な地殻変動が静かに進行しつつあった。

Granger Collection／デジタルハウス

美の出会い

帝室博物館に元老が勝った！井上馨邸だけで展示された雪舟作「山水長巻」の名物ぶり

明治三九年五月一五日まで、東京帝室博物館で「明治三十九年特別展覧会」が開催された。全国の所蔵家から出品を求めた国をあげての大展覧会であったが、ここには、室町・戦国時代の偉大な画家で、この年が没後四〇〇年にあたる雪舟（一四二〇～一五〇六）の代表作「四季山水図（山水長巻）」が展示されていなかった。この一点がないためにがっかりしたファンも多かった。

考古学者で東洋美術研究家の浜田耕作（二五＝号は青陵）も、その一人だった。浜田は、「日本美術」八九号に「此部は他の諸部に比して尤も不成功に終れる」と記した。彼は、雪舟の「破墨山水図」など数々の名品が出品されたことを評価しながらも、「山水長巻」がないことをおしんだのである。

そもそもこの帝博での「特別展覧会」は、明治三四年から始められた。前年の明治三三年のパリ万国博覧会に、日本の国威を世界に示す絶好の機会として優れた古美術品を出品し、その里帰り展を開いたのが最初だった。この年の三九年展でも古美術の珍品・絶品が並び、多くの入場者の目を楽しませてくれた。

会場は甲乙丙の三部門に分かれ、甲の部は伊達侯爵家から「法皇パウル五世肖像画」をはじめとする西洋輸入品など七四四点、乙の部は雪舟の名品「夏冬山水図」「慧可断臂図」から、雲谷派におよぶ絵画五五四点、丙の部は高野山の「螺鈿蒔絵小唐櫃」など漆器四五〇点が並べられる大展覧会だった。

一方、雪舟の「山水長巻」は、六月二日から東京・麻布の内田山の元老・井上馨（七〇）邸で開かれた、雪舟没後四〇〇年を記念した「雪舟会」に出品されていたのである。「日本美術」八九号では、この井上邸での展覧会も取り上げている。

「目下博物館に於ける雪舟派特別展覧会には多くの名物ものも逸したる選択その宜きを得ざるを病みたる者は井上伯の此会に依り大にその意を充たしたらむか」とし、四〇〇年を経て、長州出身の井上が「古名匠を供養する志は太だ厚し」と結んでいる。長州の山口は、雪舟のアトリエ・雲谷庵があったところである。

帝室博物館が、所蔵家の毛利氏に、「山水長巻」の出品を依頼しなかったとは考えられない。明治の元老の一人である井上は、旧主家である毛利氏をどのように説得したのか、詳細はわからない。いずれにしても、明治政府の元老という権力、三井財閥と結託してたくわえた財力、明治時代屈指の古美術品コレクターとしての井上の力が、博物館に勝ったということだけは確かである。

雪舟没後四〇〇年間、いずれの時代も、雪舟は日本最高の画家の一人として親しまれ、崇敬されてきた。それまで変わることのなかった雪舟の人気について、東京国立文化財研究所の島尾新氏は次のように述べる。

「雪舟は、直弟子の宗淵など同時代の画家に私淑されたことはもちろん、桃山時代の長谷川等伯からは『師祖』と仰がれ、幕府御用絵師の狩野派の画家も雪舟を模写し学んできた。中国に渡った雪舟は『中国に偉大な画家はいない、中国の自然を師とした』と豪語したという話が残っているが、日清・日露戦争に勝利した当時の時代背景の中で、偉大な画家としての評価はますます高まったのでしょう」

その後も、雪舟の評価は高まることはあっても減じることはなかった。中でも特筆すべきなのは、昭和三〇年一〇月、ウィーンで開かれた世界平和評議会で、昭和三一年度の世界十大文化人として、モーツァルト、ドストエフスキーらと並んで、雪舟の名前があげられたことである。昭和三一年は雪舟没後四五〇年にあたり、東京国立博物館は「雪舟展」の準備中であった。戦後のこの「雪舟展」では、「山水長巻」「天橋立図」のほか、ボストン美術館から当時雪舟作と伝えられていた「猿猴鷹図屏風」など、宗淵、雪村、等伯らの弟子や系列の作家の作品七十余点が出品され、観覧者総数一〇万人を超えた。マスコミは「世界の雪舟」を掲げ、雪舟ブームが巻き起こった。

雪舟の作品は現在、「山水長巻」「天橋立図」「秋冬山水図」「破墨山水図」「山水図」の五点が国宝に指定されている。絵画部門では最多の点数である。

◀自邸での井上馨（明治43年5月撮影）。外相・農相・内相・蔵相を歴任。財政・経済上に功があった。

▲「慧可断臂図」。明応5年（1496）。紙本墨画淡彩、183.8×112.8センチ。達磨に入門を乞い、自分の腕を切って決意を示した僧に、達磨は慧可という名を与え、入門を許した。達磨の衣など、雪舟のほかの作品では見られない描法が特徴的。 斎年寺／京都国立博物館

▲▼「四季山水図（山水長巻）」。文明18年（1486）。紙本墨画淡彩、398×1653センチ。中国・南宋の画家・夏珪（かけい）の山水図を手本として制作された。雪舟作品中の白眉と言われ、以降、日本の山水画の規範となった。 毛利博物館（2点とも）

20世紀博物館

新聞博物館

熊本市

偉大な言論人輩出の地の鉛活字に新聞の将来を問いかける

桑原茂夫

▲活版印刷術で活躍したつわものたち。右手前の半円形の鉛板が、輪転機にかけられる印刷用の版。とても重く、一人ではもちあげられない。右奥には、新聞紙大に活字を組む「大組台」なども見える。 新聞博物館提供

九州・熊本地方の中心的メディア「熊本日日新聞」の制作センタービル内に、この新聞博物館がある。昭和六二年に開設された博物館だが、なぜここ熊本の新聞社に、という疑問には明確な答えが返ってきた。

ひとつは、ハード面に理由があった。熊本日日新聞社では、昭和五五年一月三一日付の新聞をもって、活版印刷による新聞発行が終焉し、コンピュータによって入出力される印刷に切り替わった。それ以来、前世代のものとなってしまった印刷術あるいは新聞発行術を残しておきたいという気持ちがあったからだ。

▲新聞活字が並ぶ「文選台」。文字の大きさ別に並べられている。並び方は、新聞社独特のものである。

もうひとつの理由は、新聞作りのソフト面にかかわることだった。つまり、もともと熊本県からは優れた新聞人が輩出しており、そのような人たちを顕彰する場がほしかったということだ。

▼牧野富太郎博士が、植物採集の折に使っていた新聞紙から見つかった、明治時代の新聞題字。新聞には多様な用途があった。

ハード面については、かのグーテンベルクが発明した印刷機のレプリカや、明治二三年にフランスから輸入されて以来いろいろな新聞社でまわり続け、新聞印刷の象徴的存在ともなっていた「マリノニ型輪転機」をはじめ、活字がずらりと並ぶ「文選台」や、活字を新聞に組み上げた「大組み」、輪転機にかける「鉛版」など、新聞を毎日作り出していた活版印刷機器類が展示されている。鉛筆で書かれた記事が活字に変えられてから印刷されるまで、どの過程でもしっかりモノとして存在していたことが、この展示から実感できる。

また、新聞社ならではを実感させられたものに文選台がある。頻度の高い時事的な用語や政治家の名前などは、あらかじめ活字が組み合わされ、出番を待っているのである。これが普通の印刷所だと、大部分の活字が漢和辞典のように部首別に並んでいる。したがって、文章にそって活字をピックアップしていく作業は、まるで巨大な漢和辞典の中を歩きまわっているような感じになる。新聞社の場合は、新聞紙の中を歩きまわっているようなものだったのかもしれない。

さて、ソフト面についてだが、なぜ熊本に新聞人が多いかは、明治維新後における国家権力の人脈を見ると理解しやすい。つまり権力の中枢を薩摩・長州藩出身者で占められ、熊本すなわち肥後出身者は野に下るほかなかったという事情がある。野に下り、権力を監視し、鋭く批判する。その在野精神こそ、実は熊本人の真骨頂だったのである。

▲戦時中の新聞。手前には、トップ記事が検閲で空白にされ、その代わりに日の丸などを入れた新聞がある。左奥の欧文新聞は、真珠湾攻撃時のハワイ現地の新聞。

新聞人の展示を見ると、水俣市出身の大新聞人・徳富蘇峰がいて、ほかにも、池辺三山（朝日新聞社主筆）、鳥居素川（大阪朝日新聞社主筆）、城戸元亮（大阪毎日新聞社会長）、伊豆富人（熊本日日新聞社社長）等々、ひとくせもふたくせもある言論人たちがずらりと並んでいる。

まことに、新聞がメディアの王者らしく存在していた時代の、意気ごみや充実感が、ハード面からもソフト面からも伝わってくる、熱い博物館だった。

●新聞博物館
熊本市世安町一七二
☎〇九六―三六一―三〇七一
バス熊日世安センター前下車徒歩一分
開館時間＝九時半〜一六時半
休館日＝日曜、祝日、年末年始
入館料＝無料

空前の株式ブームに“買い”一本で荒稼ぎ、一流芸者を総揚げし5円金貨入りの汁粉を大盤振る舞い

「成金」第1号・鈴木久五郎の“栄華と没落”！

▲東京株式取引所。明治39年後半から新株式の募集が急増、「羽が生えて飛んだ」と言われるほどの活況だった。 毎日新聞社

明治三九年、株式市場はたびたび乱高下を続けた後、大暴騰に転じた。この波乱の相場を見きわめ、たくみに泳ぎ抜き、巨利を手にした男たちがいた。日本初の「株成金」の誕生である。だが、山あれば谷ありのたとえどおり、翌年には一転して空前の大暴落がやって来た。その栄華の日々があまりにも短かった人もいた。

株買い占めがあたり利益数百万円を懐に

明治三九年六月中旬、東京電気鉄道（後の東京市電の一部。当時、上野―品川間）が三銭均一の料金を一銭値上げすると噂された。すると間髪を入れず、東鉄株を「いくらでもいい。急いで買ってくれ」と兜町の株式仲買店「丸吉」に注文を出した男がいた。鈴木久五郎（二八）という銀行支店長だった。鈴木は、その日のうちに一万三〇〇〇株を手にした。

当時、東京株式取引所の一日の出来高は一〇〇〇株前後が普通だったので、この一万三〇〇〇株という数は、明治一一年に取引所が創設されて以来の「大買い占め」と評判を呼んだ。その二週間後の

▶この年の末、鈴木久五郎は、大株主として、鐘紡の主である武藤山治を追い出すことさえした。

◀浮かれる成金。有頂天の鈴久は、「待合の女将を招集して、会社の臨時総会に擬し、みずから座長の席に着き、配当として」東株の株を配った。

七月初め、噂どおりの運賃値上げが発表され、東鉄株はいっきょに八七円に暴騰する。鈴木は一株六九円から七〇円で入手したので、ざっと二三万円の利益を懐にした。突如として金満家に変身したものを将棋の「と金」になぞらえた、「成金」なる言葉が誕生した瞬間だった。

明治三八年から三九年にかけて、株式市場は激しく揺れ動いた。三八年は日露戦争の戦況によって、騰落を繰り返したが、九月五日、ポーツマスの〝屈辱講和〟の結果、大暴落する。三九年に入り、もみあっていた株価は、徐々に上昇へ向かい、鉄道・紡績株がリード役になって、ようやく活況を呈し始めたのである。

「工業化の波の中で、資金需要が増大し、調達先としての株式市場が一躍脚光をあび、市場は質量ともに急激な成長をとげたのです」

と、和光経済研究所ベンチャー企業調査部の木村由紀雄部長は解説する。

東鉄株の成功で、自信を深めた鈴木は日本郵船、鐘紡などの株買い占めに挑んでいく。それがすべて図にあたり、半年たらずで数百万円の利益を手にし、「成金王・鈴久」の名は広く世に轟いた。この頃、株を買いまくって巨利を得た人たちには、野村証券を設立した野村財閥の野村徳七（二八）、福沢諭吉の長女の入婿で「天下の相場師」とうたわれた福沢桃介（三八）、一千万長者と言われた横浜の金融業者、平沼専蔵の養子の延次郎（三二）などがいた。だが、買い一点張りの勝ちっぷりと、派手な遊興ぶりでは、鈴木の右に出るものはいなかった。

大尽遊びや邸宅購入で江戸っ子の話題を独占

鈴木は明治一〇年八月二〇日、埼玉県幸松村（現・春日部市）の資産家の次男に生まれた。一四歳で上京、東京専門学校（現・早稲田大学）に学んだ後、兄の兵右衛門とともに三一年、越谷に鈴木銀行を設立。三五年秋には日本橋小網町に同行東京支店を出店、支店長に就任した。

小網町から鎧橋をひとつ渡れば兜町で、東京株式取引所があった。周辺から茅場町一帯には株式仲買店がずらりと並んでいる。株相場の中心地の雰囲気が、鈴木の持って生まれた商才に火をつけ、株取引へ向かわせたのである。

「株界の大当り屋」（『万朝報』明治三九年九月一日）として、当時の江戸っ子の話題のまととなったという「鈴久」の成金ぶりを示すエピソードにはこと欠かない。三九年九月のこと、実業家の集まる日本橋の東京倶楽部に一人の宝石商が現れた。数カラットの巨大ダイヤを持ち出して八〇〇〇円だと言う。居合わせた金持ち連中がしりごみした中で、鈴木はろくに品定めもせず「俺がもらおう」と言い切った。もとは人気芸者だった妻・花子へのプレゼントとしたのである。

明治三九年夏頃までに鈴木が相場で儲けた金は三〇〇万円とも四〇〇万円とも言われたが、それを裏づけるように鈴木銀行の彼の個人名義預金はこの頃、二五〇万円に達し、さらに北海道、秩父、飛騨、美濃などの山林六万町歩（約五万九〇〇〇ヘクタール）を買い入れしたりしている。

さらに、新橋、赤坂、柳橋で連夜のように大尽遊びを続けた。時の桂太郎首相の寵妓のお鯉をはじめ、一流芸者の総揚げも毎度のことだった。そして、四〇人に五円金貨入りの汁粉を飲ませ、八〇〇円の東京株式取引所の株を座敷にいる全員五十余人に配ったりもした。大学卒公務員の初任給が五〇円の頃である。鐘紡株だけで五〇〇万円は稼いだと言われた鈴木は、向島に数千坪の数寄を凝らした邸を買い取り、豪華な二頭立て馬車をいっぺんに四台も注文するという大成金ぶりだった。

ところが、明治四〇年一月一八日に始まった大暴落で一敗地にまみれる。

あいかわらず、強気の「買い」一本で向かったが、今度ばかりはそれが通用しなかった。下げ幅の大きさと、反騰に転じるまでの期間が長すぎたのである。さすがの鈴久も、持ちこたえられなかった。明治四〇年六月二六日を最後に、鈴木の姿は兜町から消えた。わずか一年に満たない一瞬の栄華であった。

なぜそれほどさまざまな悲喜劇を生↖

▲安田善次郎と、その愛車、英国製のハンバー。株価の暴落は、国家の保護を受けた財閥や大企業にとって、産業支配の絶好のチャンスとなった。

佐々木烈『明治の輸入車』／日刊自動車新聞社提供

むような乱高下が生じたのだろうか。

「当時は市場がまだ未成熟でした。現在のように金利の操作で、相場をコントロールすることもまったくなかった。それに、当時の株取引は投機色が非常に強く、マーケット自体も小規模なので激動は当然のように起きる。だから、ほんの些細な材料で乱高下を起こしたのです」（前出・木村氏）

たとえば、東株株（東京株式取引所の株）の場合、明治三九年六月の一七〇円が四〇年一月には七八〇円まで跳ね上がり、さらに六月には一転して一二四円になるというありさまだった。

「結局、この時の深刻な株不況は、大正三年の第一次世界大戦まで続きました。成金も出たかわり、いっきょに資産を失って没落したものも少なくなかったのです」（前出・木村氏）

「東京パック」

▲「成金連の昨日と今日」と題された、当時の諷刺画。夜逃げや自殺をしたものも多かったという。

「太陽」

▲死んでも、なお救済を求めている成金。急速な株式会社の発展がもたらした、あだ花だった。

7~8月

フォト＋日録で再現する365日

「イリュストラシオン」

◀**クロンシュタットで叛乱(7月30日)**ロシアのペテルブルグに近い軍港で革命騒ぎ。煽動者と見られる工兵の予防拘禁が続き、ヘルシンキのスカッデン(写真)も海兵隊が占領。

▶**武者小路実篤、学習院高等科卒業(7月)**成績はビリから4番目。トルストイに傾倒し、「ト」の字を見ると顔がほてったという。前列左から二人目は志賀直哉、実篤は後列右端。

「帝国画報」

▶**三遊亭円朝七回忌(8月11日)**怪談噺・人情噺などを得意とした名人の死を悼み、東京・谷中の全生庵で盛大に法要が行われた。写真は、法師姿で集まった門人たち。

◀**東京・銀座で鉄材崩れ、9人死亡(7月15日)**連日の豪雨のため、銅鉄器商の鉄材置き場が倒壊。隣家の理髪店・そば屋をつぶし、20人近くが下敷きになった。

「帝国画報」

▼**英軍、エジプト人4人を絞首刑(7月18日)**前月、狩猟中の将兵がエジプト女性に発砲、怒った農民が軍人一人を殺した「デンシワーイ事件」の見せしめ。激しい反英・民族闘争に発展した。

「イリュストラシオン」

明治39年7月

1(日)●京釜・京仁両鉄道の買収実施。
2(月)●大分県下に明治二年以来の豪雨。各地の河川が増水、直入郡では崖崩れで親子三人死亡。
3(火)●靖国神社が風致保持のため露店禁止と新聞に。
4(水)●エム・パテー活動写真会(頭取・梅屋庄吉)が東京・新富座で初興行。
●英仏伊、エチオピアでの勢力圏設定の協定。
5(木)●東京・上野公園の大樹が多数枯死、と新聞に。
6(金)●ウラジオストク在住の日本人有志が、福利増進目的の日本人協会を組織、と新聞に。
7(土)●ハワイ移民船が長崎からも出航、と新聞に。
8(日)●東京で女学生のパクリ(万引き)流行と新聞に。
9(月)●東京地裁、電車賃値上げ反対騒乱事件(3月)の被告・大杉栄ほか一一人に無罪判決。
10(火)●振替貯金の払込用紙が無料となる。
11(水)●新潟・直江津で大火、約一一〇〇戸焼失。
12(木)●仏の元参謀本部員・ドレフュスに無罪判決。
13(金)●日本・カナダ通商条約公布。
14(土)●富士紡績、東京瓦斯紡績の合併を株主決議。
15(日)●佐佐木信綱ら、東京・下谷に歌文共進会を結成。会員に有料で短歌・文章などを添削。
16(月)●米国・セントポール島付近で日本人のアザラシ密猟者に沿岸警備隊が発砲、五人が死亡。
17(火)●東京市、市区改正費としてロンドンで外債一五〇万ポンド募集を決定(応募はふるわず)。
18(水)●東京市街鉄道、初めてボギー車を使用。
19(木)●富士山頂に郵便局が開設される。
20(金)●実践女学校で清国留学生の第一回卒業式。
21(土)●慶応義塾教師・向軍治が、多数の死者を出した日露戦・旅順攻略を批判、問題化。
22(日)●長崎で山林買収問題から小作農が富農を襲撃。
23(月)●煙草専売局、製造タバコの種類を公示。
24(火)●逓信省、判任官に女性一七人を初めて任命。
25(水)●露軍の捕虜となった「金州丸」乗員の陸海軍将校八人、軍法会議で免官ほかの判決受ける。
26(木)●隅田川が台風で氾濫、約三八〇戸浸水。
27(金)●上野動物園に豪から針モグラ到着、と新聞に。
28(土)●原敬内相、山県有朋派一掃のため、県知事六人・事務官三〇人以上を休職とする。
29(日)●曹洞宗大本山・総持寺(石川県、明治31年火災焼失)、神奈川県鶴見へ移転決定。
30(月)●リップマン、写真術による色彩再現法を仏科学アカデミーに提出。
31(火)●関東総督府、奉天・鉄嶺・安東の軍政署廃止。

CORBIS・BETTMANN/PPS

▲**アムンゼン、北極北西航路を初横断(8月31日)**3年前、故国・ノルウェーを出発し、カナダ北部に滞在。北極で越冬(写真)後、ベーリング海を経てアラスカのノーム岬に到着した。

▼**袁世凱、立憲準備を上奏(8月12日)**内外の圧力を受け、清国は立憲君主制への移行を急いでいた。袁は直隷総督兼北洋大臣、実権を握りつつあった。

日本郵船歴史資料館提供

◀**日本郵船、欧州航路に初の日本人船長(8月)**横浜－ロンドン間の「博多丸」(写真)に、村井保船長が乗船。ボンベイ航路、米国航路に次いだ。欧州航路開設は明治29年だった。

▶**ストルイピン、暗殺未遂(8月25日)**革命運動に徹底弾圧でのぞむロシアの首相兼内相の別荘が、アナーキストの爆弾に襲われて崩壊。本人は難を逃れた。

「イリュストラシオン」

「イリュストラシオン」

▲**児玉源太郎、涙雨の葬儀(8月30日)**知将の誉れ高かった参謀総長が、54歳で脳溢血のため急死。史上初の金鵄勲章功一級が与えられた。写真は、東京・青山に向かう葬列。

▶**フランスが日曜の営業禁止(8月)**キリスト教の安息日であることを強調、工場法制定以降も定着しない週休制を法制化した。写真は、日曜日にマルヌ川で釣りを楽しむパリ市民。

EDIMEDIA/デジタルハウス

▼**日米海底ケーブル開通(8月1日)**日本本土から小笠原を経て、グアム島にいたる海底電線が開通し、米国本土に接続。それまでは上海経由。写真は、開通記念絵はがき。

明治39年8月

1(水)●関東総督府を廃し、旅順に関東都督府設置。
●内務省、東京市内電車賃値上げ(四銭)認可。
●日米海底電信線、開通。
2(木)●ビール需要増でキリンも品切れ、と新聞に。
3(金)●上野図書館、閲覧書トップは医書、と新聞に。
4(土)●露で日露通商条約交渉開始(翌年7月調印)。
5(日)●イラン国王、詔勅を発し国会召集に同意。
6(月)●廃兵院条例公布。東京・渋谷の廃兵院(9月1日開設)に日露戦の傷病兵を収容。
7(火)●清国、日本への学生派遣を停止。
8(水)●前年九月沈没の戦艦「三笠」を引揚げ。
9(木)●日露戦の生死不明者は九〇〇人、と新聞に。
10(金)●大阪市に衛生試験所設立。
11(土)●仏人・ロースト、音の出る映画「サウンド・オン・フィルム」発明、特許権を取得。
12(日)●清国の北洋大臣・袁世凱、立憲準備を上奏。
13(月)●横浜―上海間定期船「博愛丸」の「スチュワーデス」(女性給仕)が評判、と新聞に。
14(火)●西園寺公望首相、官邸で俳句会催す。
15(水)●英王・エドワード七世、独皇帝・ウィルヘルム二世と建艦制限を協議(合意は不成立)。
16(木)●東京砲兵工廠、不良品に対する弁償金差し引き制度に不満の職工一〇〇人余を解雇。
17(金)●チリのバルパライソで地震大火、数千人死亡。
18(土)●呉海軍工廠の職工三〇〇人、戦時手当廃止に反対し騒擾(翌日以降、造船部などに拡大)。
19(日)●浅草海苔の満韓への輸出が活況、と新聞に。
20(月)●キューバで反大統領派が叛乱。米が出兵鎮圧。
21(火)●ウラジオストクで、革命党関係の書類を持っていた日本商人が勾禁される、と新聞に。
22(水)●神奈川で最も人出の多い避暑地は大磯・平塚、次いで小田原、と新聞に。
23(木)●三菱、大阪製煉所の拡張工事完成。
24(金)●外務省、清国に満鉄株式への応募問い合わせ。
25(土)●青森・嘉瀬村の村民四〇〇人、貯蓄籾売却に反対して米倉を襲い一六〇〇俵を各戸に分配。
26(日)●三井が新社員の身元保証人制廃止、と新聞に。
27(月)●商船学校教授創案の船舶用風力計を積み、練習船がオーストラリアへ出航予定、と新聞に。
28(火)●閣議、大博覧会開催(明治45年)を決定。
29(水)●社会党員・菊江正義、東京・日本橋で電車賃値上げ反対演説。群集四〇〇人が警官と衝突。
30(木)●関東地方、稲作は近年希有の豊作と新聞に。
31(金)●探検家・アムンゼン、北極北西航路を横断。

「帝国画報」

◀**市電値上げ反対市民大会開く(9月11日)**大雨にもかかわらず、東京・神田の錦輝館に1700人余が参集。5日には集会後、電車が破壊される騒ぎとなっていた。

「帝国画報」

▲**東京勧業博、上棟式(9月29日)**翌年3月20日開催をめざし、東京・上野公園に陳列館を建設。高さ50尺の足場の上で、神官を招いて修祓迎神の式をあげた。

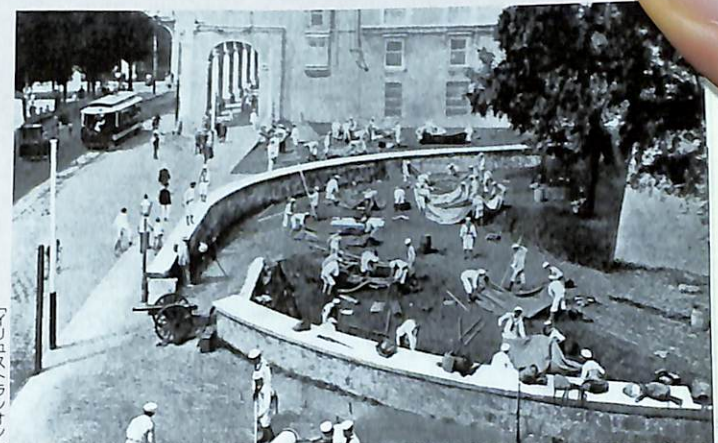
▼**新渡戸稲造(44)、一高校長に(9月28日)**札幌農学校教授、京都帝大教授を経て就任。その人格主義教育が、生徒たちにおよぼした影響は大きかった。写真前列中央。

▶**サンフランシスコで日本人学童排斥(10月11日)**市教育委員会がクレー街の東洋人小学校(写真)へ、朝鮮人学童とともに隔離・転校させることを決議。青木駐米大使が抗議し、翌年、条件つきで撤回。

「太陽」

「太陽」

◀**京都帝大、文科大学が開講(9月11日)**理工科・法科・医科に続いて開設。哲学・教育学などの講座をおき、設立以来9年ぶりに、当初の構想が実現した。写真は、新任教授陣と後列中央・狩野亨吉学長。

「イリュストラシオン」

▲**米国、キューバ占領(9月22日)**パルマ政権が火をつけた反独裁の内乱に、「介入権」を行使。ハバナ港から海兵隊・水兵1500人を上陸させた。25日に政権は崩壊、1909年まで統治した。

明治39年9月

1(土)●タバコ「ゴールデンバット」発売(一箱四銭)。
●大連を自由港として開放。
●韓国統監府機関紙「京城日報」創刊。

2(日)●第一回汎ゲルマン会議、ドレスデンで開催。

3(月)●台湾総督府・関東都督府に顧問をおくと公布。

4(火)●東京・神田で鉄道工事現場の煉瓦が崩壊、女性作業員一人が即死、三人負傷。

5(水)●東京市内の電車賃値上げ反対運動が激化、日本橋などで電車を破壊。九〇人余検挙される。
●宮崎滔天、「革命評論」創刊。

6(木)●日本美術院(院長・岡倉天心)が規則を改正、絵画部門を東京に、彫刻部門を奈良におく。

7(金)●隅田川の汽船が二銭均一に値下げ、と新聞に。

8(土)●韓国に日韓友好目的の大東協会設立と新聞に。

9(日)●函館—札幌間の直通列車が運転開始。

10(月)●住友伸銅場、英人電線技師を雇用。

11(火)●東京市街鉄道・東京電気鉄道・東京電車鉄道の三社が合併、東京鉄道設立(東京市電の前身)。

12(水)●外国医師免許令が公布される。

13(木)●東京電力、設立。

14(金)●北里柴三郎、帝国学士院会員となる。

15(土)●横浜正金銀行の関東州・清国における銀行券発行に関する勅令公布。銀兌換の銀行券発行。

16(日)●埼玉で養豚に原因不明の伝染病流行と新聞に。

17(月)●満韓塩業会社設立、東京で創立総会。

18(火)●横須賀鎮守府では、無線電信の導入により軍用伝書鳩を廃止、と新聞に。

19(水)●米国移民局、日本人渡航時に容貌の特徴・現金所持金額などの記載を徹底化、と新聞に。

20(木)●奈良・吉野の金峰神社で出火、源義経ゆかりの遺跡で知られる蹴抜の塔を焼失する。

21(金)●露革命党、皇帝の独裁を非難する宣言書配布。

22(土)●米・ジョージア州のアトランタで反黒人暴動。

23(日)●米国大使館勤務の通訳官が法政大学に入学、米国人の日本の大学入学は初めて、と新聞に。

24(月)●園芸の進歩で全国に種苗店が増加、と新聞に。

25(火)●キューバのパルマ大統領が辞任。米国、臨時政府を樹立しキューバ占領。

26(水)●巡査給与令を公布。非番日の臨時勤務に一日五〇銭以内の勤務手当支給、など。

27(木)●飯塚啓著『動物発生学』刊(唯一の発生学書)。

28(金)●新渡戸稲造、一高校長に就任(〜大正2年)。

29(土)●東京・上野で、東京勧業博覧会会場の上棟式。

30(日)●米国・セントラル鉄道、電気機関車を初導入。

証言・あの日この日
三宅雪嶺(46)

12月4日(火)〈暮の十二月四日、社員十八人が自分の宅に来て連袂退社することに決した。それで従来の雑誌日本人を日本及日本人と改題することにした。伊藤側でも覚悟を決め、新社員を以て継続を計つたが、思はしく行かず、火災があつたりして廃刊した〉(三宅雪嶺『雪嶺自伝』)

「日本新聞社」社長・陸羯南が肺患にかかり、それがかなり重かったために新聞経営から手を引くことになった。その後をそっくり引き継いだのが、日銀局長をつとめたことのある伊藤欽亮という人物だった。別に悪い人間ではなかったが、三宅雪嶺ら古参社員とは編集方針があうはずもなかった。とうとうこの日、社員18人が三宅宅に集まる。そして総勢20人が一斉に退社することが決まる。三宅らは、翌年、従来の雑誌「日本人」を「日本及日本人」と改題して再出発する。(山崎行太郎)

CORBIS-BETTMANN/PPS

▲**ロンドンでパーマ誕生(10月8日)**ドイツ人美容師・ネスラーが、電熱利用の機器を考案。1個700グラム近いクリップ多数を頭につけ、6時間以上我慢した。

毎日新聞社

▲**山県有朋「帝国国防方針案」上奏(10月)**仮想敵の確定、戦略計画など、陸海両軍の統帥の強化をはかる最高国策。翌年4月4日制定。写真右は西園寺首相。

三越提供

◀**三越、洋服部再開(10月1日)**洋服の浸透に着目、英国から裁縫師を招き、最新の紳士服を縫製した。明治21年にも洋服店を開店、時期尚早で撤退していた。

▼**豊田佐吉、画期的自動織機を発明(10月10日)**ついに自動化の核心をつく「経糸解舒及緊張装置」で特許取得。12月には、豊田式織機株式会社を創立した。

「帝国画報」

「イリュストラシオン」

▲**ドイツで世界初の電送写真(10月17日)**ミュンヘン大学物理学教授・コルンがセレン光電池を使い、1800キロ離れた場所への独皇太子の顔写真電送に成功。

明治39年10月

1(月)●吉岡弥生ら、大日本実業婦人会を東京で結成。

2(火)●今年の流行はエスペラント・浪花節と新聞に。

3(水)●ベルリンでの第一回国際無線電信会議で、国際遭難信号「SOS」の採用が決まる。

4(木)●三越呉服店、一〜三日の売り出しが大盛況、前日の来店者数は一万八〇〇〇人と新聞に。

5(金)●満鉄株、第一回募集締め切り。総申し込み約一億六六四万株で空前の一〇七七倍余。

6(土)●米英、ニューファンドランド島(カナダ南東)の漁業権につき暫定協定を締結。

7(日)●イラン、第一回国会開設。新憲法を制定。

8(月)●英の美容室に電熱式パーマネント機器初登場。

9(火)●東京市、早期実現めざし、臨時市区改正局設置。

10(水)●豊田佐吉、自動織機により特許取得。

11(木)●米国・サンフランシスコで日本・韓国人学童を白人から隔離命令。
●夏目漱石、談話会「木曜会」を開始。

12(金)●南西アフリカでヘレロ族が叛乱、独軍が鎮圧。

13(土)●第一生命、東京・日本橋に新社屋竣工。

14(日)●横浜で実業三大会挙行(輸出品品評会褒章式ほか)。市中では国旗を掲揚。

15(月)●東京で聾唖者大懇親会。各地から多数の来賓。

16(火)●谷口房蔵ら韓国棉花を設立。

17(水)●ミュンヘン大物理学教授・コルン、一八〇〇キロ離れた場所への写真電送に成功。

18(木)●帝国劇場発起人総会を開催(創立委員長は渋沢栄一。12月7日、帝国劇場会社を設立)。

19(金)●孫文らの中国革命同盟会、湖南省で中国回復・共和国建設などをスローガンに蜂起。

20(土)●うまい駅弁、東は静岡駅・西は大阪駅と新聞に。

21(日)●シンガーミシンが裁縫女学校開校。

22(月)●名古屋電力、設立。

23(火)●鶉猟、富士山麓が最近の穴場、と新聞に。

24(水)●池野成一郎、『植物系統学』刊。メンデルの遺伝法則を日本で初めて紹介する。

25(木)●宇治川電気(社長・中橋徳五郎)、設立。

26(金)●関東都督府、営業取締規則を制定(都督の許可一〇種、民政署長の許可五二種を指定)。

27(土)●「報知新聞」、夕刊発行。日本初の永続的夕刊。

28(日)●福田英子ら、社会主義婦人会開催。

29(月)●韓国銀行、創立(11月開業)。

30(火)●憲兵条例改正。台湾・韓国などに憲兵隊常置。

31(水)●警視庁、事故を起こした東京鉄道の車掌らに制裁強化、すでに免許取り消し三人と新聞に。

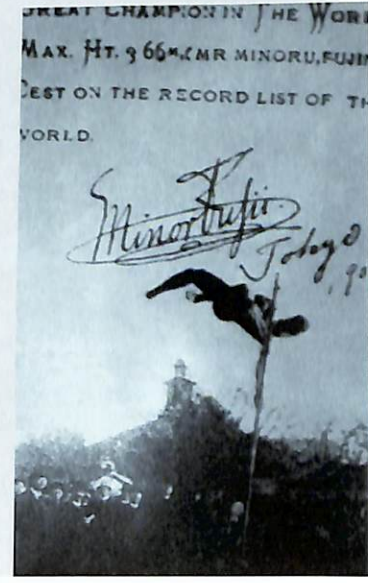
「イリュストラシオン」

▲欧州初の動力飛行（11月12日）ブラジル人のサントス・デュモンが、みずから設計した箱型尾翼の複葉機に乗り、パリの空を220メートル、21秒間飛んだ。

「帝国画報」

▲戦艦「薩摩」進水（11月15日）前年5月、横須賀工廠で起工。英の「ドレッドノート」にもまさる大艦、と喧伝され、明治43年3月、竣工。写真は建造中の様子。

茨城県天心記念五浦記念館提供

▲日本美術院絵画部、茨城・五浦に移る（11月9日）東京美術学校を飛び出して8年、院長・岡倉天心による経営不振打開策だった。写真は五浦での制作風景。手前から木村武山、菱田春草、横山大観。

▶藤井実、棒高跳び世界新（11月10日）東京帝大の運動会で、3メートル90を跳躍。藤井は100メートル走でも4年前に世界新。これらの記録は米国の年鑑に収載された。写真はその1枚、前年の3メートル66記念の試技。

「イリュストラシオン」

▲ルーズベルト米大統領、パナマへ出発（11月9日）6日に大統領に再選されるやいなや、軍艦「ルイジアナ」でパナマ運河地帯とプエルトリコへ。現職大統領として、初の外国視察だった。

▶池上競馬場、オープン（11月24日）慶応年間に横浜居留地の外国人が根岸で始めた競馬は、政府の軍馬改良の意向と合致。東京競馬会が荏原郡池上村で第1回競馬、日本人開催初の馬券を発売した。

馬の博物館提供

明治39年 11月

1（木）●東京・一ツ橋の共立女子職業学校、初めてタイプライチング講習科を開設。
2（金）●秀英舎、ダウソン型平台印刷機を完成。
3（土）●久邇宮稔彦に東久邇宮家の称号（一四番目）。
4（日）●東京師範と慶応、初の器械体操競技会を開催。
5（月）●名古屋瓦斯、設立（東邦瓦斯の前身）。
6（火）●清国、中央官制改革（六部の尚書を一一部に）。
7（水）●大阪で塩専売廃止運動。全国約一〇〇人参加。
8（木）●露の日露戦役費は一七億円、と新聞に。
9（金）●ルーズベルト米大統領、パナマ視察に出発。
10（土）●藤井実、棒高跳びで三㍍九〇の世界新。
●清国、林権助駐清公使に日本政府のみの満鉄設立は条約違反と抗議（日本は回答せず）。
●文芸協会演芸部第一回大会、「ヴェニスの商人」「常闇」などを歌舞伎座で上演。
11（日）●この日の早慶野球戦、応援団過熱で無期延期。
12（月）●サントス・デュモン、パリで、ヨーロッパ初の動力飛行に成功。飛行距離二二〇㍍。
13（火）●傷害で禁固刑・執行猶予中の東京の男性が再び傷害事件、初の執行猶予取り消しと新聞に。
14（水）●日本精製糖、大阪の日本精糖を合併し、大日本製糖と改称。
15（木）●戦艦「薩摩」、横須賀工廠で進水式。
16（金）●東京・神田署、女学生に卑猥な絵はがきを販売していた「絵葉書お房」を逮捕、と新聞に。
17（土）●医師会規則公布。歯科医にも医師会規則適用。
18（日）●漢城（現・ソウル）に東・西両本願寺別院落成。
19（月）●京阪電鉄設立（明治43年、京都―大阪間開業）。
20（火）●谷本富著『新教育講義』刊。自由主義的な新教育運動の先駆けとなる。
21（水）●清国、阿片禁止章程を改正。
22（木）●露・ストルイピン首相、農民層の革命気運封じのため、自作自農など認める農業改革法公布。
23（金）●慶応義塾にホッケークラブ、創設。
24（土）●東京競馬会、池上競馬場で第一回競馬開始。
25（日）●大杉栄、仏紙の無政府主義的記事を雑誌「光」に翻訳掲載（秩序紊乱を理由に禁固五カ月）。
26（月）●南満州鉄道株式会社、設立（資本金二億円、半額政府出資、初代総裁・後藤新平）。
27（火）●東京市会、市内電車市有案を可決。
28（水）●煙草専売局官制改正公布。煙草専売局長官制を敷く（仁尾惟茂を長官に任命）。
29（木）●東京・浅草で戦死軍人忠魂記念碑の除幕式。
30（金）●東京・芝白金の伝染病研究所、落成式。

「写真画報」

▲佐々木高行、鳩杖拝領（12月）皇太子・皇女養育主任などを歴任し、喜寿を迎えた老臣に天皇が特別の思し召し。鳩は食物を喉に詰まらせないという伝承から、長寿の象徴とされた。写真は祝典で。

◀伊藤博文、韓国統治状況を奏上（12月4日）統監府統監として保護国化政策を強行、抗日運動に火がついた。写真は参内の記念撮影。中央が伊藤。その右が施政謝恩の韓国特使・李址鎔。

「伊藤博文伝」

◀ドイツ海軍の「Uボート」第1号就役（12月14日）"死の商人"クルップ社が建造した潜水艦は、水中でも分速268メートル、45センチ魚雷を装備。第1次大戦では"灰色の狼"とおそれられた。

▶初のラジオ放送成功（12月24日）米国人・フェッセンデンが、無線塔から「聖夜」などを発信、沖合8キロの船で受信された。写真は翌年2月、定期放送を開始した"ラジオの父"デフォレスト。

「写真画報」

▲絵はがき展覧会開く（12月7日）漱石や鷗外も自分で絵を描いて、絵はがきを送ったくらいのブーム。東京・神田の錦輝館に並んだ珍品に、マニアは大喜び。

◀白秋（21）、新詩社同人と南紀旅行（11月4日）4月から与謝野寛（写真右下）の新詩社に参加、「明星」に詩を発表。マント姿が北原白秋。伊勢神宮裏で。

明治39年 12月

1（土）●東京市立日比谷図書館の設立、告示。
2（日）●ルーズベルト米大統領、日本人学童排斥問題を米連邦最高裁の審判に委任。
3（月）●ローマ字ひろめ会、東京・学士会館で臨時総会。前島密が漢字廃止説の歴史を演説。
4（火）●革命党員・蔡紹南ら、江西・湖南省で蜂起。
5（水）●南助松ら、大日本労働至誠会・足尾支部結成。
6（木）●英、トランスバール自治政府を承認。
7（金）●各呉服店、着物は青色系が流行色、と新聞に。
●国語調査委員会編『口語法調査報告書』刊。
8（土）●大隈重信、米国から購入の自動車に試乗。
9（日）●東京・品川沖で強風のため海軍水兵・婦人ら一〇〇人の乗る渡船が沈没、六〇人余死亡。
10（月）●ルーズベルト大統領、日露和平貢献でノーベル平和賞受賞（米国初のノーベル賞受賞）。
11（火）●大阪砲兵工廠で賃上げ要求スト（14日、憲兵・警官七五〇人が出動し首謀者一五人勾引）。
12（水）●日本初の天然色活動写真、東京座で興行。
13（木）●勤続二五年の東京・新橋駅長に有栖川宮が宮家紋章入りカフスボタン下賜、と新聞に。
14（金）●独海軍初の潜水艦「U1」、キール軍港で就役。
15（土）●年賀郵便取扱制度創設、全国で受付開始。
16（日）●東京・深川八幡で木製大鳥居の上棟式。
17（月）●三菱合資会社、大阪支店が新築落成。
18（火）●観光外国人の増加にともない、警視庁で通訳試験の志願者が増加、と新聞に。
19（水）●高等教育会議、義務教育延長案可決。
20（木）●逓信省が切手保存用の切手帳発行、と新聞に。
21（金）●東京・隅田川の河口改良工事、開始。
●英で労働争議法成立。労働者の争議権を回復。
22（土）●東京・神楽坂の各商店で福引が過熱、景品交換所は鉦・太鼓で大にぎわい、と新聞に。
23（日）●女性の職業として今後は速記者が有望、収入も男子と変わらず一時間三円、と新聞に。
24（月）●米国で世界初のラジオ放送に成功。
25（火）●本年度輸出高は昨年比一億円増の四億円、主要因は生糸輸出の増加、と新聞に。
26（水）●水戸・常磐神社で「大日本史」完成奉告祭。
27（木）●台北―台南間に直通電話開始。
28（金）●インド国民会議派大会、スワラージ（独立）・国産品愛用・民族教育などの四大決議採択。
29（土）●明治製糖、設立（本社・台湾）。
30（日）●電話需要増で売買価五〇〇円以上、と新聞に。
31（月）●東宮御所（現・迎賓館）ほぼ完成、造営局廃止。

俄楽多市

流行語
気宇壮大な広告の象徴

「満天下」。大国・ロシアに勝った勢いからか、新聞に一ページ広告や見開き広告がさかんになった。広告のコピーも気宇壮大なものが多く、その象徴として使われたのがこの言葉。「満天下の諸君」などで、「天下を背負って立つあなた」といったニュアンスで用いられた。

「ニュー・エスペラント」。この年、エスペラント語が大流行したが、ニュー・エスペラントは「BAKA（馬鹿）」を「AKAB」、「AISURU（愛する）」を「URUSIA」などさかさに言うこと。学生の間から始まり、若者用語に。

「勢力の注集」。日本女子大学の創設者・成瀬仁蔵の口癖で、一時間の講演で五〇〜六〇回使ったという。このことから日本女子大の学生の間では、勉強から恋愛まで、一生懸命にやることは、すべてこう表現された。

「……的」。「具体的」などという場合の「的」で、本来は哲学用語だが、これをつけるとカッコいいというので、若者からサラリーマンまで大流行した。

▲京都・島原の太夫の行列を角屋で目撃。花車と禿（かむろ）の後には、帯を前に結び傘をさしかけられた太夫。

「帝国画報」

女性
稼ぎ頭は下田歌子女史 断トツの年五〇〇〇円

目下、日本で一番収入の多い婦人は華族女学校の学監である下田歌子女史で、学監の年俸が二四〇〇円、常宮・周宮両殿下のご養育係などで二〇〇〇円、そのほか各種の原稿料が年に六〇〇円くらいあり、総計で五〇〇〇円をくだらない。次が音楽家の幸田延子女史だが、こちらは年俸一八〇〇円を含めて二三〇〇円くらい。下田女史の半分にも届かない。

（「日本」二月一五日号）

CM100年

新聞CM 「凱旋紀念五二共進会 進歩金牌受領」（宮田製作所、現・宮田工業）

▲「東京日日新聞」に掲載。広告界は凱旋陸軍大観兵式の祝賀ムードに。

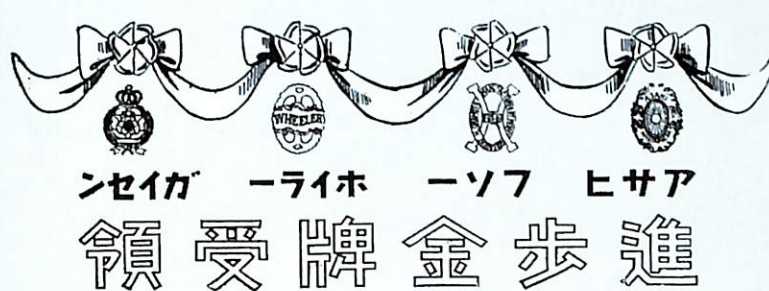
▲尾竹竹坡画「女学生十二時」。当時の女学生の一日を、放課後の4時にデート、5時に6杯飯などと戯画化したもの。「写真画報」収録。

日本漫画資料館提供

社会
人力車お抱えは四〇人 まともな明治の代議士

代議士と言えば、たいていは相当な門戸をかまえ、宿屋住まいでも一流の宿屋を選び、出入りにはかならず人力車を使ったものだが、最近はその風潮がようやく変わり、今度の議会では三七〇人余の代議士中、人力車を用いるものは七〇人前後、ほかはみな電車を利用している。しかも七〇人中三〇人は東京常住の弁護士で、代議士として臨時に車夫を抱えたものは四〇人である。

従来、議会開会中は車夫の儲け時で、食わせて着せて日給三〇円などという相場も代議士から始まったが、その気風がようやく改善されたのである。それだけに、現代議士の質素なことは驚くばかりで、多くは議事堂周辺の下宿屋に泊まりこみ、たまたま一戸をかまえるものも九尺二間的なみすぼらしい家が多い。これは賞賛すべき美風で、これでこそ議会の神聖さも保たれることであろう。

（「東京朝日新聞」二月二三日）

三面記事
地震のデマに東京中大混乱

明治三九年の初め頃であったと思う。隣りの高橋さん（後の首相・高橋是清のこと）のところの女中さんが、泣きながら私の家へ駆け込んできて「今夜、大地震があるそうですからお知らせします」と言う。今ならば、そんなこと分かるはずがないと疑問を持つだろうが、当時は科学も未発達で、お上の言うことは何でも信じこむという風潮があったからびっくりした。

それからが大変、まず食べ物の準備と、さっそく女中を買いにやらせたが、すでに情報が広がっていたらしく、買い占められてパンのかけらもないという。家中の目ぼしいものは、すぐに持って逃げられるように、いくつもの風呂敷き包みにまとめ、まんじりともせず一夜を明かした。

しかし地震は来なかった。だが油断はならぬと、あくる晩もその次の晩も、じっと待ち続けて、みんなへとへとになった。後になって四谷や築地、深川などの親せきでも同じように騒いだと分かったから、全市的規模のデマだったのだろう。四谷の親せきなどは、地割れができて人が落ちた時の用意までしていたというから、みんな真剣であった。

（小林重喜『明治の東京生活』）

▶仏の「イリュストラシオン」一一月三日号掲載の川上一座の新進女優、花子。

「イリュストラシオン」

文化
登場！ おみくじ会社 今やシェア五〇㌫

（山口発）山口県鹿野町におみくじ製造の「女子道社」が設立されたのは明治三九年だった。近くの二所山田神社の宮司が始めたもので、当時は良妻賢母についてのパンフレットも作っていたから、こういう珍しい社名になったという。

設立後は順調に成長し、今ではおみくじ業界の最大手、全国の神社に十数種類のおみくじを供給し、シェアは五〇㌫におよぶ。おみくじの自動販売機を考案したのも同社である。

（「毎日新聞」九州版。平成元年二月八日）

風俗
噂どおりの乱れ方 当世女学生事情

最近、女学生の風紀についてとかくのことが言われているが、湯島天神下の待合（今のラブホテル）の女将にたずねたところ、驚くべき事実を語ってくれた。

「私どもに出入りする女学生はたくさんいますが、中でも美術学校が一番ですね。三〇〜四〇人くらい来るでしょうか。次が日本女学校で二十五、六人。その次が女子大で十二、三人はおりますね。

これらの女学生は学問がしたいために、ここで殿方の相手をして学資を作っているのです。中には月々五〇〜六〇円も稼いで未来の夫に送っている人もいます。それと学問しているという気位のせいか、芸者衆のように帰るのがおっくうになって、ここに泊まるという人はいません。どんなに遅くなってもかならず帰ります」

（「滑稽新聞」一〇月二〇日）

▲7月の歌舞伎座。すぐ横手には軒を並べた芝居茶屋が繁盛し、江戸時代の風情を彷彿させていた。

◀柳沢吉保を祖とする保申伯爵が自邸で開いた第二回仮装会。

「太陽」

この年の初もの
「アレルギー」という言葉を医師・ピルケが提唱

●即席カレー　東京・神田の一貫堂が「カレーライスのたね」を発売。肉も入った乾燥品で、同じく「ハヤシライスのたね」も発売。

●整形外科　東京帝国大学医学部に、整形外科学講座が開講。

●ホールインワン　六月三日、神戸・六甲山上ゴルフコースで、ドルフィンガーという外国人が記録した。

●噴霧器　害虫駆除用噴霧器がアメリカから輸入される。

はやり歌

青葉の笛

作詞　大和田建樹
作曲　田村虎蔵

一の谷の　軍破れ
討たれし平家の　公達あわれ
暁寒き　須磨の嵐に
聞こえしはこれか　青葉の笛

更くる夜半に　門を敲き
わが師に託せし　言の葉あわれ
今わの際まで　持ちし箙に
残れるは「花や　今宵」の歌

▶「青葉の笛」がおさめられた『尋常小学唱歌』。佐々木吉三郎、納所弁次郎、田村虎蔵の共編。各学年三冊ずつの全一二冊で、この歌は四学年用。

逍遙之歌

作詞
作曲　沢村胡夷

紅萌ゆる丘の花　早緑匂う岸の色
都の花に嘯けば
月こそかかれ吉田山

緑の夏の芝露に　残れる星を仰ぐ時
希望は高く溢れつつ
我等が胸に湧き返る

千載秋の水清く　銀漢空にさゆる時
通える夢は崑崙の
高嶺の此方ゴビの原
ラインの城やアルペンの

谷間の氷雨なだれ雪
夕べは辿る北溟の
日の影暗き冬の波

嗚呼故里よ野の花よ
ここにも萌ゆる六百の
光も胸も春の戸に　嘯き見ずや古都の月
それ京洛の岸に散る　三年の秋の初紅葉
それ京洛の山に咲く　三年の春の花嵐

▲京都・第三高等学校（現・京都大学教養学部）の寮歌で、中学時代から詩人として活躍した沢村（写真）が作った青春の名歌。

ユダヤ人なるがゆえの冤罪で南米「悪魔島」に スパイ罪の汚名で失われた一二年もの歳月

「ドレフュス事件」、無罪確定！

一九〇六年七月一二日、フランス最高裁は、元陸軍砲兵大尉、アルフレッド・ドレフュスに無罪を言い渡した。これにより、一八九四年の事件発生以来、フランス国論を騒がしてきた「ドレフュス事件」は最終的決着を見、四年半におよぶ投獄にもかかわらず冤罪と闘い続けた彼の無罪、名誉回復が確定した。

▶自由になった身を、支援者の山荘で休める。後列右より、ドレフュス、二人目は長女・ジャンヌ、前列左、妻・リュシー。
平野新介『ドレフュス家の一世紀』(朝日新聞社)より

名誉回復の式典後に「真実万歳！」の叫び

一九〇六年七月一二日正午、フランス最高裁（破毀院）は、一八九九年の軍法会議再審判決を破棄し、アルフレッド・ドレフュス（四六）に無罪を言い渡した。通常、上告棄却か、下級裁判所に審理やりなおしを命じる最高裁が、三一対一八の票決で、みずから異例の判決を下したのである。

ドレフュスには、前日の午後六時三〇分に判決が告げられていた。その瞬間、喜びとともに彼の胸に去来したものは、愛する家族への思いであった。「一二年間の責め苦はついに終わった。もうこれで、子どもたちの将来を思い悩む必要もなくなる」（長男、ピエール・ドレフュスの『ドレフュス』より）。↖

◀トランペットを持つ兵士が見まもる中、ジラン将軍によって、ドレフュスに勲章が授与された。復権がなった瞬間である。
「イリュストラシオン」

一二日の法廷の内外には、家族、友人をはじめ、ドレフュス支持者が詰めかけていた。無罪を知った支持者は翌日になっても駆けつけ、ドレフュスは山のような祝電に目を通すこともできなかった。忙しさの中、彼はまず、裁判を支えてくれた今は亡き作家のエミール・ゾラと詩人のベルナール・ラザールの未亡人に、感謝の手紙を書いた。また、陸軍内にあって再審のきっかけを作り、そのために孤立してしまったピカール中佐（五二）への感謝状も忘れなかった。

一三日、フランス議会はドレフュスの名誉回復に動く。下院では四四九対二六の大差で、上院でも一八二対三〇でドレフュスの少佐昇進が議決された。

七月二二日、パリ市内の陸軍士官学校の砲兵科校庭で、ドレフュスにレジオン・ドヌール勲五等勲章が授与されることとなった。授与式の場としてここを選んだのは、ほかならぬドレフュス自身である。一二年前、ここに隣接する大校庭で、彼は記章をはぎ取られ、サーベルをへし折られ、軍籍を剝奪（はくだつ）され、集まった士官たちの「行け、ユダ」という罵声（ばせい）の中を、仏領ギアナの監獄へと引き立てられていった。もし再び大校庭に立てば、あの時の無念さから平静でいられなくなることをドレフュスはおそれたのである。

午後一時三〇分、軍楽隊の吹奏とともに授与式は始まり、ジラン将軍の手によって彼の胸に勲章が飾られた。将軍と並んだドレフュスの前を、トランペットの音にのって、兵士が進む。士官は抜刀して敬礼する。軍隊の姿が見えなくなると、式典に参加した群衆がわっと彼を取り囲んだ。四方から手が伸び、握手を求めてくる。群衆の間から「ドレフュス万歳」の声があがった。彼は、即座にそれを制して叫んだ。

「共和国万歳。真実万歳！」

“反ユダヤ”をあおった陸軍一部将校の策謀

「ドレフュス事件」の発端は、一八九四年九月、パリのドイツ大使館に潜入していたスパイが盗み出した手紙であった。フランス陸軍内部に、二〇年前の普仏（ふふつ）戦争の仇敵・ドイツに、軍の機密を売り渡しているものがいる。驚愕（きょうがく）した陸軍首脳部は極秘の内偵を進め、犯人は参謀本部付砲兵士官にしぼられた。その網に、アルフレッド・ドレフュスというアルザス出身の、三四歳のユダヤ系砲兵大尉がかかった。

昭和五年（一九三〇）、この事件を紹介した作家・大佛次郎（おさらぎじろう）はこの世紀の冤罪（えんざい）事件が生まれた瞬間を、こう描いている。「ユダヤ人なのである。動いてきた立ち会いの将校たちの頭は、ここで停まって動かなくなった。（中略）伝統的な憎悪と……民族的な軽蔑が、聡明であるべき参謀将校たちの判断をにごらせたのだった」（『ドレフュス事件』）

唯一の物証である手紙とドレフュスの筆跡鑑定の結果は、二つに割れた。鑑定人の一人は別人、もう一人は同一人物と判定。しかし、それで十分であった。一八九四年一〇月一五日、ドレフュス逮捕。一

彼の一貫した否認にもかかわらず、一二月二二日、軍法会議は有罪を宣告。階級剝奪、罷免（ひめん）、そして終身流刑。翌九五年四月一三日、南米の仏領ギアナにある通称「悪魔島」の独房に収監された。

その後、陸軍参謀本部は真犯人・エステラジー少佐の存在を知る。一八九六年八月のことである。しかし、「陸軍の名誉と尊厳」を盾に、陸軍首脳部は真相解明に動こうとしない。ドレフュス有罪に

▲真犯人・エステラジー。1847年、パリ生まれ。金づかいがあらく、借金を負っていた。

▶後に首相となるクレマンソー。この時、野にあり、「オーロール」紙を創刊。ドレフュスを支持。

▶ゾラは、「弾劾」により罪に問われた。その判決直前、イギリスへ亡命、ロンドンに隠れ住んだ。

外から見たNIPPON

清国留学生・景梅九が宮崎滔天と革命を談じた日

佐伯 修

「周知のとおり日本に一人の豪傑がいる。眉毛は濃くひとみ澄み、ひげがぴんとはって背も高く、姓は宮崎、名は寅蔵、別号を白浪滔天といった」

中国のアナーキスト・景梅九（一八八二～一九五九）の回想録『罪案』（邦題『留日回顧』大高巌、波多野太郎訳）より。義侠心に富む宮崎滔天は、辛亥革命支援に身を挺した人物で、浪花節の名手でもあった。

山西省出身の景が、清国の政府派遣留学生として来日、第一高等学校に入学したのは明治三七年のこと。留学生の間で高まっていた清朝打倒の声に動かされた彼は、翌三八年、孫文が東京で革命運動の連合体「中国同盟会」を結成するや、これに加入した。そして、この年、三九年、神田・錦輝館で開かれた、「同盟会」の機関誌「民報」創刊一周年記念会で、景は滔天の通訳をつとめ、これを機に両者は急速に接近する。

ある夜、景は二人の中国人同志と、滔天を自分たちの宿舎に招いて酒を飲んだ。

「先生は酒に強くて、一斗どころか一石でもまだ酔わないほどの酒豪であった。谷、何の二君もまたよく飲む。私もお相伴して大いに飲んだ。（中略）宮崎先生もうたったが、悲壮激昂。人をふるいたたせるものがあった。何君も日本志士の詠じた巴黎革命絶句、『一刀両断す君主の首、落日光寒し巴黎城』を歌い、とくに意気を上げ互いに痛飲し、夜のあけるころには二樽の正宗を飲みほした。客が酩酊して帰ったとき、主人は酔いつぶれて送れなかった。つぎの朝、酔もまださめずに、とある神社に入って桜の花の下に立つと、あたりはひっそりしていたが、忽ち群なす鳥がこの酔っぱらいも避けずに争って木の枝にとまり、花びらが乱れ落ちた。いまそのときのことを思い出すと、夢か幻のようだ」

ちなみに、当時日本にいた革命家・宋教仁の日記にも、宋や農本主義者の権藤成卿らと、痛飲しつつ革命について語りあう、滔天の姿が記録されている。右に引用した場面は、桜の記述から明治四〇年春のことと思われ、それを回想した景の『罪案』刊行は、一七年後の大正一三年である。

だが、同じく明治四〇年、景は滔天と出会った錦輝館で、幸徳秋水らの演説を聴いて社会主義に傾倒、素朴なナショナリストの滔天とは疎遠になってゆく。景は、さらに大杉栄らに導かれ無政府主義へと向かうが、ある時など、警察の急襲を受けて大混乱のアジトで、大杉とエスペラント語の発音練習を続け、同志にあきれられたという。

「留日回顧」／平凡社提供

▶伝奇小説『紅楼夢（こうろうむ）』の研究者でもあった。

加担した一部将校は、当初から、新聞に情報をリークし、反ユダヤ・キャンペーンをあおっていた。国民の大多数に広がる反ユダヤ気運の中で、ドレフュスの無罪を求める運動は少数派であったが、一部の知識人は熱心な活動を続けた。

その一人に、『ナナ』や『居酒屋』で有名な小説家・ゾラ（当時・五七歳）がいた。エステラジー無罪の軍法会議判決を聞くと、痛烈な政府批判、軍部批判を「オーロール」紙に展開する。これが一八九八年一月一三日、同紙朝刊の一面を飾った、有名な「余は弾劾す！」である。

国論がドレフュス派と反ドレフュス派に分かれた中、一八九九年八月、再審のための軍法会議がレンヌで開かれた。ドレフュスは出席を許され、四年半ぶりにフランスの土を踏む。九月九日、判決は五対二で再び有罪。一〇日後、特赦が下されたが、ドレフュスはあくまで再審を求めた。一九〇四年三月、再審請願が受理され、一九〇六年、ようやく彼は無罪を勝ち取ったのだ。

「ドレフュス事件」は、一冤罪事件を越えて、激烈な反ユダヤ主義運動でもあった。〝同化〟によって迫害をまぬがれようとしてきた西ヨーロッパのユダヤ人にとっては、まさに衝撃的な事件であった。現在、「イスラエル国家創設の最大の貢献者」と言われるヘルツルは、当時、特派員として、パリでこの事件を目撃している。

「彼にとって、建て前上ではユダヤ人に対して最も寛大であったフランスで、これほど激しい反ユダヤ主義が燃えさかることは、大きなショックだったでしょう。この事件もひとつの契機となって、〝同化〟でユダヤ人に未来はあるのかという懸念が、ユダヤ人国家の建設という政治シオニズムにつながっていったと言えます。彼の呼びかけで、ユダヤ国家建設を宣言した第一回世界シオニスト会議が開催されたのは、事件渦中の一八九七年のことでした」

こう語るのは、『ユダヤを知る事典』の著者・滝川義人氏である。

A・ドレフュス（1859～1935）
フランスの軍人で「ドレフュス事件」の主人公。アルザス生まれのユダヤ人。名誉回復後、第一次世界大戦に参加、中佐となり退官。七五歳で死去。

▶レンヌの再審法廷に立つドレフュス（中央）。国論が二つに割れた中、治安上、安全なこの地方都市が選ばれた。

往きて還らぬ

▲10月22日　ポール・セザンヌ（67）
仏の画家。ゴッホらとともに後期印象派と呼ばれ、近代絵画に大きな影響を与えた。「トランプをする人々」など。

▲10月27日　海江田信義（74）
政治家、幕末の薩摩藩士。生麦事件でリチャードソンに止めを刺したことで有名。元老院議官、枢密顧問官を歴任。

▲11月15日　山本芳翠（56）
洋画家。明治21年生巧館画塾を創設し、藤島武二などを育成。明治座・歌舞伎座の背景画も手がける。「臥裸婦」など。

▲6月17日　矢野二郎（61）
教育家。明治5年外務省に入り、9年商法講習所所長に就任。高等商業学校校長もつとめ、商業教育に尽力。

▲7月5日　K・W・J・メッケル（64）
独の軍人。明治18年来日、陸軍大学校の教官となる。ドイツ式軍制を導入、日本陸軍の近代化に貢献。

▲7月23日　児玉源太郎（54）
陸軍軍人。陸軍大臣、台湾総督。日露戦争時には満州軍総参謀長。知将で知られた。死後、伯爵となる。

▲9月6日　L・ボルツマン（62）
オーストリアの理論物理学者。1877年エントロピーと確率との関数関係を発見。ウィーン大教授などを歴任。

▲4月19日　ピエール・キュリー（46）
仏の物理学者。ラジウムなどを発見。妻で著名な物理学者、マリー・キュリーと1903年ノーベル物理学賞受賞。

▲5月6日　初代常磐津林中（63）
浄瑠璃の常磐津節語り。明治19年林中を名乗る。30年歌舞伎座での「関の扉」が大評判となり、名人と言われた。

▲5月23日　H・イプセン（78）
ノルウェーの劇作家で、近代劇の創始者。1879年「人形の家」を発表、演劇界に衝撃を与えた。ほかに「幽霊」。

▲1月3日　岩村高俊（60）
政治家。明治7年佐賀県権令時に江藤新平の「佐賀の乱」を鎮圧。25年貴族院議員。岩村通俊、林有造は兄。

▲1月4日　九条道孝（66）
華族で、娘・節子は大正天皇の皇后・貞明皇后。明治元年、戊辰戦争で奥羽鎮撫総督をつとめる。貴族院議員、公爵。

▲1月4日　福地源一郎（64）
明治期の代表的なジャーナリスト。明治7年「東京日日新聞」の主筆、後に社長。歌舞伎の台本「春日局」も執筆。

ミニ事典
1906年のキーワード

エス・エル党
今世紀に入ってナロードニキ系諸グループが結束し設立された、ロシアの政党。社会革命党。この年一月一一日、創立大会を開催、綱領を定め、連邦原理に基づく民主共和国の建国、全ロシア憲法会議の招集、土地の社会化などを掲げたが、テロを推奨、要人暗殺を頻繁に行った。一九一七年の「二月革命」後、メンシェビキとともに多数党を形成したが、ソビエト政権に反抗、壊滅させられた。

韓国統監府
前年の第二次日韓協約で韓国の外交権を奪った日本政府が、日本公使館に代えて、二月一日、漢城（現・ソウル）に設置した行政機関。各地の領事館も理事庁に改めた。初代統監は伊藤博文。統監は天皇に直属、韓国の外交を統轄・監督し駐屯軍の出兵命令権を持った。また、翌年の第三次日韓協約で韓国の施政改善・法令制定などに関しても指導・審査する権限を持ったため、内政に対する実権をも掌握した。

▲韓国の外交・立法・行政・人事などに干渉し、韓国併合(明治43年)にいたる諸政策を遂行した統監府。

大艦巨砲時代
大口径の艦砲を搭載した、弩級戦艦を海軍力の中心にした時代。日露戦争での日本の連合艦隊の活躍が、列強の目を艦砲の威力に目覚めさせ、二月一〇日、主砲三〇センチ砲一〇門、総排水量一万七九〇〇トンという英国の巨大戦艦「ドレッドノート」進水で、一気にその幕が開いた。全盛期は、第一次世界大戦を経て戦闘機の能力に凌駕される第二次世界大戦初期まで。末期の象徴が日本の超弩級戦艦「大和」「武蔵」だった。

大日本麦酒
日露戦争後の不況期に生じた乱売合戦による共倒れ防止のため、三月二六日、日本麦酒・札幌麦酒・大阪麦酒の三社が合併して設立したビール醸造会社。本社・東京。社長・馬越恭平。七一・五パーセントのシェアを持つにいたり、ビール産業は大日本麦酒と麒麟麦酒にほぼ集約。第二次世界大戦後、過度経済力集中排除法により、日本麦酒（後にサッポロビール）・朝日麦酒の二社に分割。

最急行列車
官営鉄道が、四月一六日から新橋―神戸間で、従来の「急行」の所要時間を約四時間も短縮させ、一三時間四〇分で運転した列車。一・二等の四両編成。初めて急行料金を徴収。二等一円、一等一円五〇銭。新橋―神戸間の二等運賃は六円五五銭だった。これで、東海道線には、最急行・急行・直行の三種類の列車が運行することになった。

日本エスペラント協会
「世界共通語」エスペラント語を研究・普及させる会。六月一二日の発会式には黒板勝美・大杉栄らが出席。エスペラント語は、一八八七年にポーランド人・ザメンホフが、民族紛争の絶えない多言語地域で育った経験から、どこの国語でもなくおぼえやすいことを主眼に開発した言語。日本では、日露戦争後の国際化の高まりを反映して、二葉亭四迷が独習書を発行するなど、この頃、ブームとなっていた。

▲ロシア語に堪能な二葉亭はエスペラント運動も促進。

直接行動論
初期社会主義運動の主潮流となり、労働運動にゼネストを頻発させた戦術論。半年余の滞米生活から帰国した幸徳秋水が、六月二八日、「世界革命運動の潮流」と題した演説の中で「労働者の革命は、労働者みずから遂行せざるべからず」と述べたのが契機。二月に結成したばかりの日本社会党内に、大杉栄・山川均・荒畑寒村ら賛同者をふやし、田添鉄二らの議会政策論と激しく対立した。

関東都督府
日露戦争後に、ロシアから受け継いだ、遼東半島の租借地（関東州）と南満州鉄道およびその付属地の監督官庁。前年一一月にスタートした軍事機関が、八月一日、平時組織の行政機関に改められ、庁舎も遼陽から旅順に移された。都督には陸軍大将か中将を任用、政務は外務大臣の監督を受けたが、駐屯軍を出動させることができた。大正八年、関東庁に改組、長官は文官となったが、満州（中国東北部）侵略への動きの加速とともに、実権を関東軍が握った。

サティヤーグラハ
後に「インド独立の父」と言われたガンジーが提唱した、非暴力闘争の理念。ヒンドゥー語で「真実と強い意志」の意。九月一一日、英領南アフリカのヨハネスバーグで開かれた、指紋登録を強制する新アジア人登録法案に反対するインド人大集会で本格的に展開。集会を呼びかけたガンジーは、この闘争は悪をなくし究極の真実をつかむ正義の闘争であり、そのためには悪である暴力を使ってはならないと主張した。

▶ロンドン留学で弁護士資格を取ったガンジーは、仕事で南ア滞在中。

「革命評論」
孫文・黄興らの中国革命同盟会結成を支援、日本全権委員となった宮崎滔天とその仲間が中心になって、九月五日に創刊した雑誌。発行印刷人・青梅敏雄。表向きの主張は天賦人権論・進化論だったが、誌面のほとんどはロシア・清国の革命情報で埋められていた。翌明治四〇年三月二五日、第一〇号で廃刊した。

SOS
船や飛行機が救助を求める際に使う無線信号。一〇月三日、ベルリンで開かれた第一回国際無線電信会議で初めて採用された。従来はCQD（Come quick, danger の略）が用いられていたが、聞き取りにくかったため、モールス符号として最も簡単なSOS（…―――…）に改められたもの。SOSが確認されると、同一周波数の無線使用が禁じられ、最善の救助処置をとらねばならない。

週刊YEAR BOOK／日録20世紀 1906
CONTENTS

●編集
講談社総合編纂局
アート・ディレクター／山口至剛
表紙デザイン／山口至剛デザイン室（茂村巨利）＋渡邉裕二
本文レイアウト／デザインオフィス八起き
編集協力／㈲エービーシープレス ㈱カマル社 ㈱コミュニケーションハウス・ケースリー シド・プロ ㈲マックス ㈱マライカ
飯田守 小原伸夫 鍵和田良輔 菊地美優貴 小松邦宏 張替政展
藤森雅弘 森邦久 結城順一 吉田忠正

●写真協力
太田公平 奥村健太郎 佐々木烈 但馬一憲 平野新介 宮崎正衛
朝日新聞社 「イリュストラシオン」 EDIMEDIA AP
CORBIS・BETTMANN CPC 小学館 デジタルハウス 東奥日報社 東京書籍 PPS フォトファクトリーミハラ
平凡社 ベースボールマガジン社 毎日新聞社 WWP
ビー・エス・ケー・コーポレーション遠藤波津子グループ 三越
五十嵐健治洗濯資料館 茨城県天心記念五浦記念館 馬の博物館
北野美術館 北原照久コレクション 京都国立博物館 Grang
er Collection 斎年寺 三康図書館 新聞博物館
たばこと塩の博物館 東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫 藤村記念館 日仏会館図書室 日刊自動車新聞社 日本近代文学館 日
本赤十字社愛媛県支部 日本美術院 日本漫画資料館 日本郵船歴史資料館 毛利博物館 早稲田大学演劇博物館

雑誌 23713-11/17
Ⓛ-2001/1/1
T1123713110565

印刷　凸版印刷株式会社　製本　大村製本株式会社